

人間教育に基づいた学校経営の現状と課題

—タイ王国のサッタヤサイ校の事例を通して—

文学研究科教育学専攻博士前期課程修了

ニパーポーン・ルートアモーンパット

NIPAPORN LERTAMORNPHAT

序章 問題の意識と本研究の目的と方法

第1節 問題の意識

現在、世界中で子どもたちに教育を受ける機会を与えようとの動きの中、各国政府や各種の民間組織の協力によって学校に行ける子どもの数は増えている。ユネスコにおいても「万人のための教育 (EFA: Education for All)」¹というプロジェクトを通してすべての子どもたちが学校教育を受けられるよう支援している。しかし、学校教育の機会を得ることのできる子どもの数だけを増やすのは十分ではなく、学校教育自体の質を共に改善していくことがより重要だと考える。学校教育の質が改善されないままであるならば、子どもたちに教育を受ける機会を与えても、それがかえって子どもを苦しませることになるのではないかと考える。

筆者は、学校教育は、学習者が勉強することに幸福を感じることができ、勉強を通して人生に意義を与えることができるように学ぶことが大切であると考え。ここで、筆者は、「人間教育」の概念に注目する。第1章でこの概念について展開する。

タイの国家教育法第6条 (พระราชบัญญัติการศึกษาแห่งชาติ มาตรา6) には、「教育は、国民の心身、知恵、知識、モラル、そして生活していく上での教養を豊かに発展させ、他者と共に社会で幸福に生きていけるようにすることを目的とする」と定められている(1999年制定、2002年改正)。タイの国家教育法にも人間教育を目指すことについて述べられていると思われるが、今日のタイの学校教育の現状を見ると、人間教育というには未だ程遠く、本当に人間教育が大切だと認識されているのであろうか、と筆者は疑わざるをえない。

タイの学校教育の問題を解決するために、教育カリキュラムの改善だけではなく、校長、

¹ <http://www.unesco.org/new/en/education/themes/leading-the-international-agenda/education-for-all/mission/> 2014年1月2日閲覧

教職員、生徒²、保護者の全員が協力して当該学校全体の経営方法を改善していかなければならない³。また、子どもを度外視した効率化に陥らぬよう「人間教育にもとづいた学校経営」を中心に考察する必要がある。

第2節 本研究の目的

本研究の目的は、タイにおける人間教育に基づいた学校経営の現状を分析し、課題を明らかにしていくことである。

第1章では、タイにおける人間教育の思想を紹介し、学校経営と人間教育の現状を検討する。その課題を明らかにする。第2章、第3章では、人間教育を根本として学校経営を行っているタイの私立学校サッタヤサイ校に実際に赴いて質問紙調査やインタビューを実施した結果報告とそれについての考察をまとめた。本研究では、実際にタイの学校で運用されている良い部分と悪いと部分を分析して、他の学校でも応用でき、学校経営を改善していくことができるよう、実践的な課題面を提示できるよう努めた。

第3節 本研究の方法

サッタヤサイ校に連絡を取り、見学・調査の了承を得ることができたため、2013年8月13-14日・23-25日に訪問し、調査に協力いただいた。

サッタヤサイ校での調査は以下の3つの方法を採用した。

①学校の生徒に質問紙調査

質問紙調査は初め日本語で作成し、担当教授に確認してもらった後再度タイ語に翻訳し、2013年8月23日に実施した。質問紙調査の配布方法は筆者が直接学校を訪問し、朝のホームルーム時に配布、その後クラス毎に順次回収した。

②インタビュー調査（半構造化面接）

柱となる質問項目を用意しつつ、状況に応じて柔軟なインタビューを定期的の実施する半構造化面接を通して、データを分析した。インタビューの対象者は、創立者1名、校長1名、校長の顧問1名、

² なお、本論文では、初等教育・中等教育の被教育者は、すべて「生徒」と称する。日本では、小学校・中学校・高等学校・大学で、それぞれ、児童、生徒、学生と分けるのが一般的であるが、タイでは、小学校・中学校・高等学校において、すべて“นักเรียน・student”に該当する呼称で呼ばれている。

³ 小松郁夫は、「学校経営」とは、「各学校がその組織目的・目標を達成するために、人的(man)、物的(material)、予算的(money)諸条件(3M)を整備し、その組織運営に関わる諸活動を統括する活動をさす。類語に学校管理、学校運営などもあるが、学校を自らの意思をもつ自主的、自立的組織ととらえると、独自に教育目標やミッション（使命、役割）を明確にし、その成果を自ら検証もすることが重要である。マネジメント・サイクルを各学校がもつ状況になると、管理や運営という表現より、経営という言葉の方がふさわしい」（岩内亮一ほか編『教育用語辞典』第四版、学文社、2010）と定義した。

本論文は、「学校経営」の中で、教員・職員・児童生徒・保護者を指す人的(man)条件を中心に考察する。

教師 1 名、従業員 1 名、保護者 2 名、生徒（高校 2 年）1 名の計 8 名である。

③ 参与的観察

筆者は第三者として調査対象を観察した。授業内と授業外の教え方を対象とした。

第 1 章 タイ王国における学校経営と人間教育の現状

第 1 節 人間教育に関する思想

本論文でとりあげるタイのサッタヤサイ校はこの要求を満たす数少ない学校である。当該校は、人間教育を掲げアットオン・チュムサイナアユッタヤ(Dr.Art-ong Jumsai Na Ayudhya) 博士によって 1992 年に創立された。人間教育にもとづき、社会に貢献する美しい人間をつくることを目指す学校であり、モットーによると、「教育の最高の目的は美しい人格をつくること」⁴とされている。また、ビジョンは「何よりもいい人間をつくること(To create good people above everything else)」⁵とされている。

「児童生徒を豊かな人間に成長させること。人間性の価値 5 つの項目 1)慈悲・慈愛 2)真理 3)正義 4)平和 5)非暴力に基づいた徳性に秀でている人間は、現代社会で幸福な生活を送ることができる。児童生徒たちは慈愛・慈悲を持つこと、美しい礼儀作法を身に付けること、責任感を持って社会で自分の任務を果たすこと。そして、独自の文化、宗教、伝統に関して学ぶこと」⁶ はタイのサッタヤサイ校の目的である。

創立者であるアットオン博士は、「すべての人が探し求めていることは幸福であり、幸福は外界から得たり、多くの知識を集めること感じることはできません。幸福は人の心から生まれるのです。よって、教育は心を根本とすることに重点をおかなければなりません。知識を多く持つ優秀な人物にすることだけではなく、自分で幸福になることができる人物を育てることが大事です。」と述べている。この人間の幸福と心に重点を置いたアットオン博士の思想は、「人間教育」と称するにふさわしいものであると言える。

第 2 節 タイ王国の学校教育制度

タイの教育制度

仏歴⁷ 2542 年国家教育法（西暦 1999 年）と仏歴 2545 年改正法（第 2 版・西暦 2002 年）及び仏歴

⁴ <http://www.sathyaith.org> 2013 年 8 月 23 日閲覧

⁵ 同上

⁶ 同上

⁷ 「仏歴 พุทธศักราช Phutthasakkarat」（略称 พ.ศ.）は、仏陀生誕の B.C.543 年に始まる。西暦に直すには 543 年を引く。

2545年国家教育法施行令（西暦2002年）において、タイにおける教育は、3つに区分されている。

1. フォーマル教育 (formal education)
2. ノンフォーマル教育 (non-formal education)
3. インフォーマル教育 (informal education)

である。

本論文では、この3つの区分の中のフォーマル教育についてのみであることをここであらかじめ断っておく。フォーマル教育には2つの段階がある。それは「基礎教育」と「高等教育」である。

1. 基礎教育(Basic Education)

基礎教育には、3つの段階がある。「就学前教育」、「初等教育」、「中等教育」である。

(1) 就学前教育

通常3歳から6歳までの子どもに対する教育であり、生活を基礎とした指導や子どもの健康、精神、学力、ムード、人格と社会生活を準備する。

(2) 初等教育

生徒に求められる道徳や倫理、基礎知識を身に付けるための義務教育であり、期間は基本的に6年間と定められている。

(3) 中等教育

中学校の教育は、小学校から学んできたことを基礎に、生徒が様々な面において成長できるように、自身の興味や能力を知り、仕事への準備も視野に入れた義務教育である。期間は基本的に3年間と定められている。1999年の国家教育法の制定により、2002年3月から6年間の義務教育から6・3年制の9年間に延長された。

高等学校の教育は、主に進学または就職に向けて、生徒の興味と能力を促し、社会的に必要なスキルを発展させることを重視している。期間は基本的に3年間と定められている。また、高等学校の教育には一般教育と職業教育がある。一般教育とは、大学進学に向けて、生徒の興味、能力、専門性を向上させようとする教育である。職業教育とは、専門学校または就職に向けて、生徒の知識と職業的スキルを向上させようとする教育である。

後期中等教育段階において、生徒は普通教育と職業教育を選択し、この時点で専門教育が始まる。普通教育を受ける生徒は学術機関でのさらなる学習に備え、職業教育を受ける生徒は労働市場に参入するための訓練を受ける。職業教育を受けた生徒は職業・技術カレッジに進学し継続的に教育を受ける場合もある。

2. 高等教育(Higher Level)

高等教育は2つの段階に分けられる。一つは、短期大学レベル(Diploma Level)であり、もう一つは大学レベル(Degree Level)である。

タイの教育現状

ここでは、2012年度における各学年の学校教育制度内の生徒（フォーマル教育を施している学校で学ぶ者のこと。以降、「学校教育制度内」と称する）数と学校教育制度外の生徒（ノンフォーマル教育とインフォーマル教育で学ぶ者のこと。以降、「学校教育制度外」と称する）数の生徒数を比較する。全体では、学校教育制度内の生徒は85%以上、学校教育制度外は15%を占めている。各教育段階における比率をみると、小学校では、学校教育制度内の小学生94%、学校教育制度外6%である。中学校では、学校教育制度内の中学生が100%である。高等学校では、学校教育制度内の高校生63%、学校教育制度外の高校生37%である。筆者は、生徒のうち学校教育制度内において学習する割合の多いことから、学校教育が子どもに大きな影響を及ぼしていると考え。学校には、生徒の成長過程における重要な役割や責任がある。

また、Unicef Thailandの統計によれば、初等教育では就学率は100%を超えているが、卒業できる児童の割合は少ない。タイのEFA報告書(EFA Mid-decade Assessment)によれば、2005-2006年タイの児童の卒業率は86.1%に留まっている。また、2012年に基礎教育委員会の学校に通う小学校1年生から高校3年生までの生徒数6,593,427人のうち、退学者は27,930人であり0.42%の割合を示している。退学者0.42%のうち、小学生が0.11%（小学生全体3,461,367人）、中学生が0.75%（中学生全体2,036,863人）、高校生が0.82%（高校生全体1,095,196人）である。2010-2012年の統計を見ると、退学者は毎年増加し、3年間で約37,855人に上った。退学の主な理由は、経済的事由、移住、妊娠、服役などである⁸。

第3節 タイ王国の学校経営と人間教育の現状と課題

タイの学校経営の現状

ユニセフ協会の2001-2005年の調査(ONESQA)ではタイの30,010の学校で実施した1回目の外部評価の結果によると、19,507の学校(65%)が生徒、教師、学校経営の面で一定の基準(学校の質)を下回っていることが明らかになった。基準を満たしている学校は369校(1.2%)しかないのが現状である⁹。2009年の学校教育の事務局に割り当てられた予算は国家予算の11.5%であり、年間国家予算の最大の割合にもかかわらず、一定の基準を満たしている学校が少ないことは、タイにおける大きな課題の一つと考えられる。また、2006年から2007年の調査によれば、15,515校のうち、3247校(約21%)が、国家が示す教育標準を下回っている。こうした学校教育の質の低下は、学力低下と社会問題を引き起こす大きな要因の一つと考えられる。

⁸ タイ教育省教育政策計画局 Office of Permanent Secretary, Ministry of Education สำนักงานปลัด กระทรวง กระทรวงศึกษาธิการ, *2012 Educational Statistics in Brief สถิติการศึกษาฉบับย่อ๒๕๕๕* (In Thai and English) 2012, Table 27, p.74.

⁹ http://www.unicef.org/thailand/education_15799.html

教育の機会を得ることができる子どもの数が増えたことは喜ばしいが、実際には学校教育を受けた者の学力と人格の両面で問題は増えていると思われる。

タイにおける学力問題

学校教育の質は、タイにおける大きな課題の一つである。国内調査によれば、過去10年間でタイの子どもたちの主な教科の学力は低下している。2012年の学力調査の結果では、小学生の、国語、数学、英語、科学、社会科、芸術、キャリア教育科のすべての教科において、平均点が50%未満¹⁰。中学生では、数学、英語、科学、社会科、芸術、キャリア教育科の平均点が(8教科中6教科が)50%未満¹¹、高校生では、国語、数学、英語、科学、社会科の平均点が(8教科中5教科が)50%未満であった¹²。2011年の学力調査と比較すると、高校生では全教科において平均点が増加しているが、小学生においては全教科において平均点が下がっている。また、2012年度のOECD生徒学習到達度調査(PISA)の結果によると、65か国中タイは読解力で48位であり、PISAの平均点496点に対して441点、科学では47位で平均点501点に対して444点、そして数学では50位で平均点494点に対し427点と3教科とも平均点を下回る結果となっている(2009年に実施されたOECD生徒学習到達度調査(PISA)では、タイは読解力と数学50位、科学49位)。

また、2011年のTIMSSにおいて、タイは小学校4年生と中学校2年生が参加した。小学校4年生では52カ国が参加し、タイにとっては初の参加となった。タイの小学4年生の算数の点数は458点で34位となり、全体的に見ると低いレベルに位置している。科学は472点で全体の29位であり、平均レベルに位置していた。中学校2年生では45カ国が参加した。タイの中学2年生の数学の点数は427点で全体の28位であり、全体的に見ると低いレベルに位置しており、科学は451点で25位、全体的に見ると同じく低いレベルに位置していた。2007年のタイの中学2年生の結果に比べると、数学と科学は、どちらも点数が下がっていた。

ブリーチャー・デーシー博士の研究によると、教員の面ではタイの教員はシンガポールの教員よりも大学卒の割合が多いにもかかわらず、TIMSSの結果によると数学と科学の2教科においてタイの成績はシンガポールに比べ大きく下回っている。また、国籍別に教員の授業への自信と授業の準備に対して調査した結果によると、タイの教員は数学と科学の2教科ともシンガポールに比べ、生徒に教える自信が低く、授業の準備の質も低いことが読み取れる。これについて、ブリーチャー博士はタイの教育は教員・学校・生徒のすべての面が向上し、学力の質が早急に改善されるよう協力しなければならないと述べた¹³。

¹⁰ タイ教育省教育政策計画局 Office of Permanent Secretary, Ministry of Education สำนักงานปลัดกระทรวง กระทรวงศึกษาธิการ, *2012 Educational Statistics in Brief สถิติการศึกษาฉบับย่อ๒๕๕๕* (In Thai and English) 2012,

¹¹ 同上

¹² 同上

¹³ ブリーチャー・デーシー博士「教育省のTIMSS 2011 調査結果の概要」

人間教育に基づいた学校経営の現状と課題

さらに、基本教育委員事務局による小学3年生と6年生の読書に関する統計の結果(183の地区のうち80の地区)では、小学3年生800,000人のうち64,000人(8%)が文字が読めないことが分かった。小学6年生では800,000人のうち32,000人(4%)が文字が読めず、前年比で2~3%増加している。

こうした学力低下の原因について、ユニセフは「学力低下の原因は、授業の質や教員の質の低さや教員の量的な不足など様々な原因があるとみられる。また、教育のための予算は莫大であるにもかかわらず、なぜ多くの生徒が悪い成績で学校を卒業するのだろうかという疑問がある」¹⁴と報告している。

タイにおける人格面の問題

学校内で起こった生徒の問題をここでは扱う。以下表1-1で全国の生徒のうち問題行動を起こした生徒または問題行動を受けた(或いは目撃した)生徒の割合を示した。

表1-1 全国の学校内の問題(生徒の割合)¹⁵

	小学生	中学生	高校生
恐喝された生徒	9.05	16.60	14.38
身体的暴力を受けた生徒	29.57	26.15	25.75
学校内において麻薬所持および使用を目撃	6.06	13.96	15.52
凶器の所持を目撃	21.89	30.21	29.51
定期的に授業をサボタージュする生徒	0.95	2.84	4.05
宿題の丸写しおよび試験のカニングをする生徒	54.95	73.35	81.53

(出典) Office of Promotion of Children, Youth, the Elderly and Vulnerable Group

学校内の麻薬所持および使用について、例えば、「麻薬中毒の青年の割合が高い。2004年に麻薬を中毒している15歳から19歳までの青年の割合が46.2%占めており、2006年には50.3%に上った。また、初めて麻薬を使用する児童の平均年齢は徐々に下がっている(2004年の20.5歳から2006年の19.6歳)」(2007年の国立社会統計記録指標局)と、深刻な学校の問題となっている。また、「15歳以下の児童が中毒となる傾向が高くなっている。児童が中毒となるものはアンフェタミン、揮発性ものとたばこである。」(青少年・貧困・高齢者の福祉振興保全局の状況発表2011年)という状況もある。

タイの薬物乱用防止機関の2012年のデータによると、タイの若者の間における薬物使用状況は非常に懸念されるべきであり、若者の薬物使用は増加している。特に、学校で薬物を使用する若者が増

¹⁴ 2001年の子どもと女性の状況の分析 タイの国連児童基金組織(ユニセフ)

¹⁵ 個人資料情報と地方資料情報を採集して処理された:2006-2007年少年と児童状況発表

えており、小学生と中学生の年代の子どもたちに対して薬物使用を防ぐために近くで監視する必要がある。将来薬物を使用する恐れがある7～19歳までの人口は1200万人と予測されており、これは新しく薬物を使用する恐れがある全世代の中で最も高い割合となっている¹⁶。

学校は生徒の良い部分を育てる場所である。しかし、現在は薬物乱用という問題が存在している。学校内では薬物の問題が起きないようにするために、子どもに薬物の危険性を理解させる必要がある。学校内の薬物に関する問題は、未成年の犯罪を引き起こすと考えられる。これは、薬物乱用に関連している未成年者の犯罪率が2006年から2007年にかけて12.9%増加した。また、2008年1月から3月の3か月間で38.4%に増加したというデータ¹⁷からもいえることである。

2008年から2012年における全国の青少年の事件に関する統計¹⁸によると、2012年に事件を起こした青少年の82%は15歳から18歳が占めており、11歳から15歳の青少年犯罪者の数が6,108人に上るなど2010-11年の統計と比較し、その数が増加傾向にある。一般的に犯罪を起こす青少年は貧しい家庭で育ち、学歴も低い人物だと考えられているが、2012年のデータによると青少年犯罪の一番多い年代は中学生で、次は小学生、その後に高校生と高校生以上の年代の青少年であり、学校に通っていない青少年の割合が一番低かった。青少年犯罪の種類で一番多いものは薬物使用で、その次に窃盗、そして暴行罪と続いている。

ストレスや悩みを抱えている割合が最も多かったのは中学生から高校生1年生であり89.3%を占めている。次に就職等を理由とした非学習者が87.9%、大学生が87.5%と短大や専門学校等に通う学生が85.5%に達している¹⁹。

青年期にストレスや悩みを引き起こす第一の問題は学習の問題であった。続いて金銭、恋愛、交友関係、家族、健康、賭け事、貧困、麻薬などの問題が挙げられる。

一方、教員の行為に起因するストレスや悩みでは、難しい宿題を与えることが一番多かった。次に、競争を強制すること、不公平な態度、意見を認めないこと、怒鳴ること、暴力的行為と続く。友達の行為に起因するストレスや悩みでは、いじめられること、仲間外れ、脅迫、暴力行為と続いている。また、悩んでいるときに信頼する人として、一番多い割合を示したのが友達であることが分かった。次に親、自分、親戚、インターネット、教員、宗教、神様、若者相談センターなどである。

調査の結果わかったのは、現代のタイの青年は従来の青年が経験したことのないような周囲の圧力に直面しているということである。情報化社会において急速に変化する世界や、現代のような激しい競争社会の中で成功者のみが就職を勝ち取り前進する。その結果、タイにおける子どもたちの子育てと学校教育は、競争に勝つために焦点を当ててきた。それは、他人は友達ではなく、ライバルや敵であるという認識を生み出した。この問題は、10代のすべての若者へ直接的に影響しており、回避され

¹⁶ <http://www.oknation.net/blog/LittleLee/2013/09/24/entry-1>

¹⁷ 国家経済社会開発 2551 オフィス

¹⁸ www.djop.moj.go.th/images/djopimage/stat55.pdf

¹⁹ バンコク大学が行った15歳から22歳までの男女1850人を対象としたアンケート調査（2004年）

人間教育に基づいた学校経営の現状と課題

ていない可能性がある、と結論づけている²⁰。

こうした問題は学校教育の質の低下に起因していると考えられる。学校教育が改善されなければ、この問題を解決することができないばかりか、さらに大きくなるであろう。この問題を解決するには、社会全体として取り組む必要があるが、学校が取り組むべきところも大きい。学校では、教員の質だけでなく、学校経営全体の質を向上させる必要がある。そして、知識中心の考え方ではなく、人間を中心とした教育であるべきである。つまり、現代のタイにおいて「人間教育」が求められているといえよう。「人間教育」を生徒だけでなく、学校内のすべての人間（学校管理者、教員、スタッフ、その他関係者）に行き届かせ、一人一人の価値を引き出すことで、自他ともの幸福、より良い社会の形成に向かうことができると思われる。

タイにおける人間教育の現状と課題

タイでは、一般的な知識中心の教育を行っている公立学校とは別に、1979年には独自の目標や指導スタイルを持った「オルタナティブ教育」を行う学校および機関があらわれた。

現在、「オルタナティブ教育」を行う教育機関は私立学校を含め 209 しかない。「オルタナティブ教育」は様々な形態の学校経営、理念がある。

ここで、一般の知識中心教育とオルタナティブ教育を比較し、その違いを確認しておきたい。以下、スラクの研究をもとにその比較を表 1-2 で示す。

表 1-2 一般の知識中心教育とオルタナティブ教育の比較

一般の知識中心教育	オルタナティブ教育
1. 知識の理解が強調されているが、その知識は断片的なものに留まる。また、生徒の他の可能性をかえりみることはない。	1. 知識だけではなく、心や身体も注目する。友人また人間と自然との関係を重視。生徒に対し様々な可能性を見出し開発する。
2. 教員が中心であり、生徒は受け身的な学習を行う。また、教員は機械的である。カリキュラムは教育者が決定し、そのほとんどが生活から離れている。	2. 教員と生徒はお互いに学び合い、自由な意見交換がある。教員が正当化される必要はない。生徒が、学習の内容とプロセスを決定する。
3. 個人主義、競争、利己主義を重視。	3. グループで学習し、互いに手伝う。
4. 自国の文化や宗教を軽んじ、モダン文化を称賛。	4. 自国の文化や宗教に誇りを持つ。モダン文化を無批判に受け入れない。

²⁰ 同上

一般の知識中心教育	オルタナティブ教育
5. 劣等感を与え、生徒は不満感を持つ。また、低学歴の人間を尊敬しないように教える。	5. 自己の人生に満足し、他人を尊敬する。社会的地位を重視せず、人生の意味を教える。
6. 将来のために学ぶ。	6. 自己の成長、幸福のために勉強する。
7. 教室だけで学習する。本やメディアが中心。卒業した生徒の学習に対する意欲は薄い。	7. 自ら学習することができ、生活から学ぶ。卒業後も継続して学習する。

(出典) Suchada Jukpisut, *Kaansuksaa Tangruak-Thann Kormoon Karnwikok* การศึกษาทางเลือกฐานข้อมูลวิเคราะห์ (『オルタナティブ教育分析データベース』), 2005,

上記の比較表において、オルタナティブ教育（人間教育）の優位性が示されているが、それでも課題は多く残っている。オルタナティブ教育（人間教育）の課題はまず、社会的認知度が低く、未だ一般的な学校教育が主流を占めていることである。教育は、学校に行って、教育省のカリキュラムや教科書を学ぶことと見られており、自分の将来のためのキャリアの目標こそが重要で、教育とは学校のみで学習することと考えられている。学齢期の子どもは、標準の学校教育制度で教育されなければならないといった考え方が一般的であり、また、教育省もオルタナティブ教育（人間教育）に理解を示しているとは言えず、協力的ではない。さらにはオルタナティブ教育（人間教育）も試験による評価を避けられず独自の教育の成果を確認することが難しい。進学や試験のための知識を身につけることが目的ではないため、進学を目指す子ども・家庭からは、進学に不利であると考えられている。学費が高いことも課題の一つである。次章以降、実際に人間教育を行っている学校の事例を見ていきたい。

第2章 人間教育にもとづいたタイのサッタヤサイ校

第1章では、タイには人間教育にもとづいた学校がごく少数（209校）であることを述べた。しかし、中には人間教育を行う学校としてタイ国内外で注目されているサッタヤサイ校(Sathayasai School โรงเรียนสัจจวิทยา)がある。この学校には月あたり200人以上の人々が見学を訪れ研究を行っている（2013年）。また、同校を見学し研究した教育者が、同校の思想にもとづき同校名をつけたとする学校を建設している。例えばカナダ校、オーストラリア校などを始め35以上の国々に計57校ある（2014年現在）。筆者は、同校の教育方針や学校運営を含む全ての概念が人間教育と一致しており、人間教育にもとづいた学校経営をしていると考えた。したがって、同校が事例調査対象として適切であると考えた。

第1節 学校の理念と沿革

1. 学校の沿革

サッタヤサイ校は1992年に創立された私立学校で、タイの首都バンコクから北におよそ200km離れたところに位置する（www.sathyasait.org）。私学ロップブリー県第2教育地区事務所に属しており、およそ350人以上の生徒を擁している。規模としては中規模の学校に分類される（中規模の学校とは、合計121人から499人の生徒を擁する学校のことを指す）。幼稚園児は自宅から通園し、小学生、中学生、高校生は寄宿学校で生活する。小学生から高校生までの寮生活の意義は、授業時間外に、生徒の潜在的な能力の開発を目指し、日常生活での発揮を可能とすることにある。生徒たちは、授業外でもスポーツや音楽やボランティアなどの活動を行うことができる。また、教員も寄宿所で生活し、授業時間外も生徒の諸活動を観察することで、生徒の行動をより良くしようとしている。こうした取り組みにより、学校の指導方法と実践内容を向上させることができるという。

本論文では、幼稚園を除く、初等・中等教育のみに言及する。タイは1958年にユネスコ・スクール²¹のメンバーとして登録され、現在、100以上の学校がプロジェクトのメンバーとなっている。そして、サッタヤサイ校は、ユネスコ・スクール(ASP ネット: Associated Schools Project Network)の目

²¹ ユネスコ・スクールは、1953年、ASPnetとして、ユネスコ憲章に示されたユネスコの理想を実現し、また、平和や国際的な連携を学校での実践を通じて促進することを目的に設けられた。ユネスコ・スクールは、そのグローバルなネットワークを活用し、世界中の学校と交流し、生徒間・教師間で情報や体験を分かち合い、地球規模の諸問題に若者が対処できるような新しい教育内容や手法の開発、発展を目指している。2013年には60周年を迎え、世界180カ国で約9,000校がASPnetに加盟して活動している。

詳細は、http://www.unesco-school.jp/?page_id=34 参照。

的・教育・学習の経営視点が一致しており、同プロジェクトに参加している²²。

同校内では、同校の研究手法の学習要請者を訓練するためのサッタヤサイ教育研究所(Institute of Sathyasai Education)がある。コースは英語で開講され、修了者証明書が授与される。学習者の多くは外国人教師である。

学校の歴史

サッタヤサイ校は、アットオン・チュムサイナアユッタヤ (Dr.Art-ong Jumsai Na Ayudhya) 博士によって 1992 年から開校し、人間教育を行う学校のプロトタイプという位置づけをもっている。主流(普通)の学校教育にこの学校の人間教育のカリキュラムや手法を広めることを目指している。

サンスクリット語によるサッタヤサイの「サッタヤ」は真実を意味し、「サイ」は、母を意味する言葉から来ている。つまり、サッタヤサイ校は真実の原点を意味する学校である²³。

人間教育にもとづいたサッタヤサイ校は、社会に貢献する美しい人間をつくることを目指す学校であり、モットーによると、「教育の最高の目的は美しい人格をつくること」²⁴とされている。また、ビジョンは「何よりもいい人間をつくること(To create good people above everything else)」²⁵とされている。

「生徒を豊かな人間に成長させること。人間性の価値 5 つの項目 1)慈悲・慈愛 2)真理 3)正義 4)平和 5)非暴力に基づいた徳性に秀でている人間は、現代社会で幸福な生活を送ることができる。生徒たちは慈愛・慈悲を持つこと、美しい礼儀作法を身に付けること、責任感を持って社会で自分の任務を果たすこと。そして、自他の独自の文化、宗教、伝統に関して学ぶこと」²⁶がサッタヤサイ校の目的である。

人間性の価値を中心とした教育は、学力やスポーツ、その他の面に対しても徹底されている。また、それは生徒だけでなく、教員、職員²⁷、保護者に対しても行われる。具体的なことは以下のミッションで述べている²⁸。

- (1) 人間性にもとづき、美しい人格を持ち、よい模範となり、心を向上させ豊かな人間になるため、生徒・職員・教員・保護者をサポートし育成する

²² http://www.bic.moe.go.th/th/index.php?option=com_content&view=article&id=139&Itemid=93

²³ サッタヤサイ校の名称はインドのサッタヤサイがつくった学校に共感したアットオン博士がタイで学校を開校するときに受け継いだものであるが、カリキュラム等は全く別物である。互いのネットワークによってサッタヤサイ校は 35 カ国 57 校が開校された

²⁴ <http://www.sathysaith.org> 2014 年 8 月 23 日閲覧

²⁵ 同上

²⁶ 同上

²⁷ サッタヤサイ校の「職員」とは教員以外の給食作りや掃除、農作を手伝う事務職員や技術職員などを指す。

²⁸ <http://www.sathysaith.org> 2014 年 8 月 23 日閲覧

人間教育に基づいた学校経営の現状と課題

- (2) 生徒たちが勉強するのにふさわしい環境と雰囲気をつくり、潜在能力を引き出せるよう実践的な教育をする
- (3) 生徒が徳性・学力・スポーツや得意な分野で能力を発揮できるようにサポートする。
- (4) 生徒が生涯学び続けるため、自分で国内外の情報源から知識を探しだすことをサポートする
- (5) 学校側は教員の指導力向上のために授業研究をサポートする
- (6) 自給経済の哲学と安定した学校の経営

2. 学校の創立者

サッタヤサイ校の創立者²⁹は、サッタヤサイ校の学校経営においても重要であるため、詳しく述べておきたい。創立者アットオン・チュムサイナアユッタヤ(Dr.Art-ong Jumsai Na Ayudhya)博士(1940-)は、現在、サッタヤサイ校の最高経営者であり、サッタヤサイ教育研究所長とサッタヤサイ財団会長の役割も務め、当該校で教員としても活動している。

イギリスのケンブリッジ大学で機械工学の学士課程と修士課程を卒業し、その後イギリスのロンドン大学科学技術インペリアルカレッジで博士号を取得した。また、タイのチュラロンコン大学の教育学部の博士課程で教育カリキュラムと指導法について学び、タイのマヒドン大学の教育学部の博士課程においても学校経営について学ぶなど、3つの博士号を取得している。同氏の過去から現在までの職業経歴は、工学や科学の分野だけではなく、政治、会社経営、教育の仕事に従事するなど幅広い。これらの経験は、サッタヤサイ校の経営にとって非常に有益だと考えられる。

3. 学校の施設・設備

サッタヤサイ校はパーサク川とヤーンカタ山に隣接しており、自然が美しく、熱帯の穏やかな雰囲気を持っているため、学習する場所として最適である。また学校は広大な面積を有する。この学校を(1)女子生徒エリア(中央)(2)男子生徒エリア(3)農地エリアの三つのエリアに分けて説明していきたい。

(1) 女子生徒たちは学校の中央エリアに配属されている。以前は男女一緒に学習していたが、2012年から学習場所が拡張され、小学校4年生以上の男子生徒は男子生徒のエリアに移って勉強することになった。女子生徒のエリア構成は以下のようになっている。

〈教育棟〉

- ・このエリアにおける主要な建物となっており、3階で構成されている。13の教室が配置されており、初等中等教室、図書室、理科室、コンピューター室、職員室、指導室、会議室がある。

²⁹ 「サッタヤサイ校の創立者」は、学校を創立したと同時に、学校の経営者としても役割を果たしている。本論文では「創立者」と呼ぶ。役職上は校長の上に当たる。

- ・幼稚園棟は幼稚園の教室2部屋、子ども用の遊び場がある。
〈学習室やその他の施設〉
- ・家庭科室と技術室棟
- ・英語棟
- ・生徒活動棟
- ・舞踊と音楽室棟
- ・美術棟
- ・84年棟（仏間、日本語教室、中国語教室、サッタヤサイ教育研究所の会議室、サッタヤサイ教育研究所の図書室、客間で構成される棟）
- ・体育館
- ・運動場
- ・プール
- ・遊技場
- ・水力発電、風力発電、太陽光発電、バイオガス発電などを学ぶことの出来る施設
- ・水教育研究所(Institute of water education)、水について学習できるセンター
〈食堂〉
〈本部棟（校長室、教務室、保健室で構成される）〉
〈寮〉
- ・女子寮は5つあり、一つは4つの棟で構成されているため全部で20棟ある。
- ・SAI2000棟（4階建ての建物で、教師や学校見学者むけの宿泊施設となっている。）
- ・創立者の自宅

（2）男子生徒のエリア

〈教育棟〉

- ・中学生と高校生の教室が配置されてある。
- ・光教育棟（小学生4年生から6年生までの教室が配置されており、2階は寮がある。）
〈食堂、図書室、英語室〉
〈運動所〉
〈男性教員の寮〉

（3）農地エリアは、米の農地、庭の野菜栽培、果樹園や貯水池が含まれている。貯水池の水は農業用水や飲料水として使用される。

人間教育に基づいた学校経営の現状と課題

サッタヤサイ校は、一般的な学校と比べ広大な面積を有し、コンピュータ機器なども備えている。また、生徒が様々な体験ができる設備などを備えているため、生徒が体験を通して学習することができる。学校は生徒が体験を通して学ぶことの重要性を理解している。

第2節 サッタヤサイ校の質問紙調査

1 質問紙調査の方法

本質問紙調査は2013年8月23日に実施した。2013年8月23日には、サッタヤサイ校で本稿筆者と学校職員が朝のホームルーム時に質問紙を配布し、クラス毎に昼休み時間もしくは下校時間に回収した。

2 質問紙調査結果の概要

本質問紙調査の結果は、サッタヤサイ校の児童生徒合計331人中、小学校6年生から高等学校3年生（1学年1クラス）までの138人を対象とし、返答のあった有効回答100人（全体の約72%）から作成したものである。なお、無効回答38人中、体調不良2人と課外授業中の高等学校3年女子生徒12人を含む14人が欠席、残りの24人が無回答であった。

対象を小学校6年生からと設定したのは、初等教育の最高学年であり、中等教育の進路選択時であるため、過去6年間の「人間性の授業」に対する意見と成果を示せると考えたためである。

表2-1 2013年度生徒数

学年	男子	女子	合計
小学校1年生	17	18	35
小学校2年生	27	28	55
小学校2年生（愛情組）	16	12	28
小学校2年生（慈悲組）	11	16	27
小学校3年生	14	20	34
小学校4年生	19	16	35
小学校5年生	12	22	34
小学校6年生	14	14	28
中学校1年生	6	9	15
中学校2年生	7	8	15
中学校3年生	9	12	21
高等学校1年生	11	8	19
高等学校2年生	10	12	22
高等学校3年生	6	12	18
合計	152	179	331

（注1）2年生の慈愛組と慈悲組とは、クラス名である。クラスを「慈愛組」・「慈悲組」と名付けたのは、1組、2組といった単なる数字の羅列よりも、意義のある言葉を児童に触れさせたいと教職員が考えたことによる。

質問紙は3要素により構成されている。

1. 回答者の属性質問
2. 選択質問
3. 記述質問

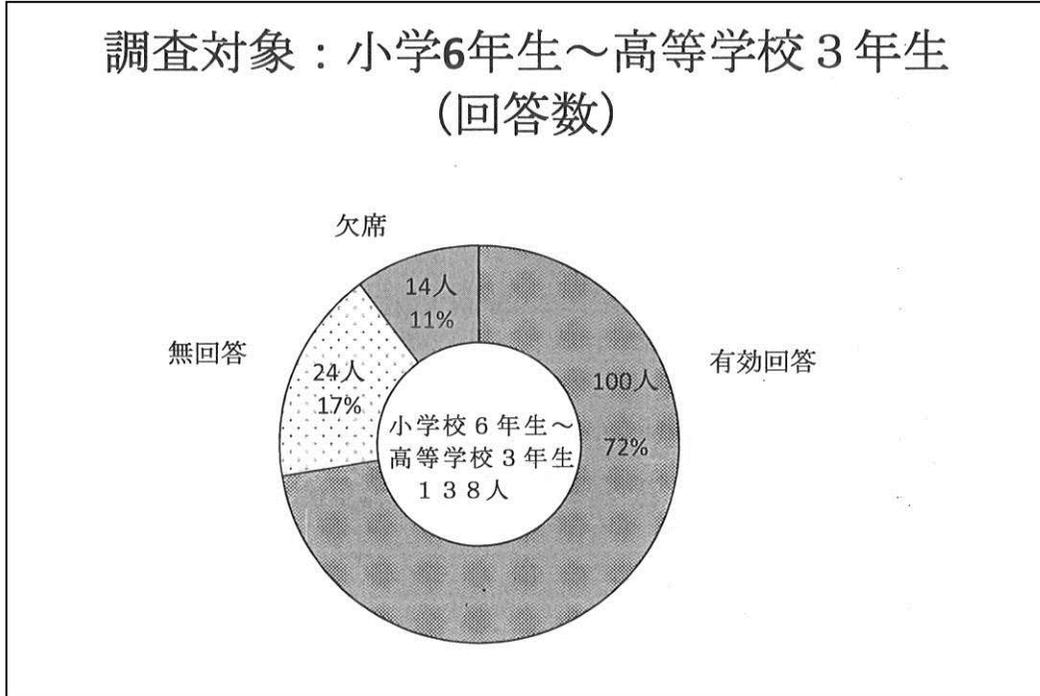


図2-1 調査対象数

1. 回答者の属性質問

① 性別 全体の100人中、男子は42人(42%)で女子は58人(58%)であった。

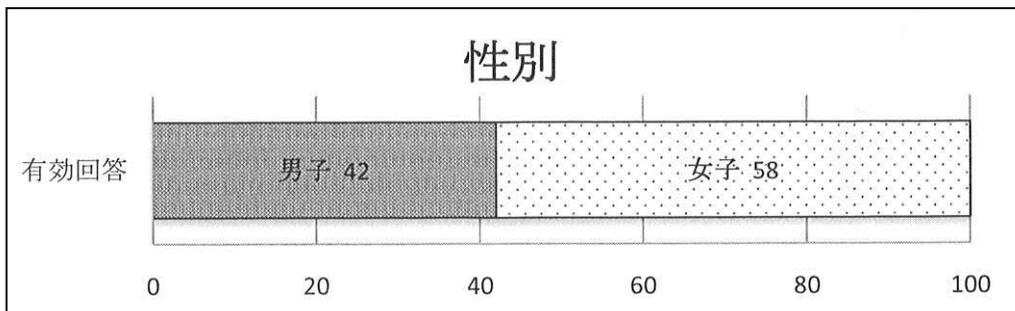


図2-2 回答者の性別

②学年 小学校6年生から高等学校3年生まで100人であった。

学年と性別で回答者人数を区分すると下表のようになる。

表 2-2 学年・性別ごとの回答者人数

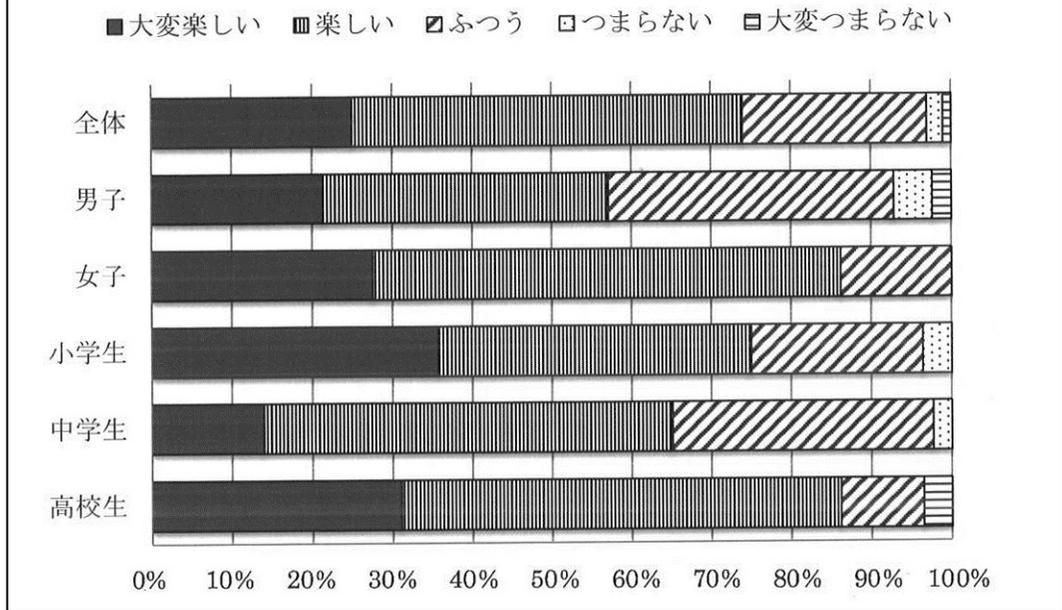
学年	男子	女子	合計
小学校6年生	14	14	28
小学生	14	14	28
中学校1年生	4	9	13
中学校2年生	7	7	14
中学校3年生	4	12	16
中学生	15	28	43
高等学校1年生	4	7	11
高等学校2年生	4	9	13
高等学校3年生	5	0	5
高校生	13	16	29
合計	42	58	100

2. 選択質問

全7問の各質問項目について、回答者の気持ちや考えに最も当てはまる回答を選択肢の中から一つ選んでもらった。

問1. この学校の勉強は楽しいですか。		
「大変楽しい」	25人	(25%)
「楽しい」	49人	(49%)
「ふつう」	23人	(23%)
「つまらない」	2人	(2%)
「大変つまらない」	1人	(1%)

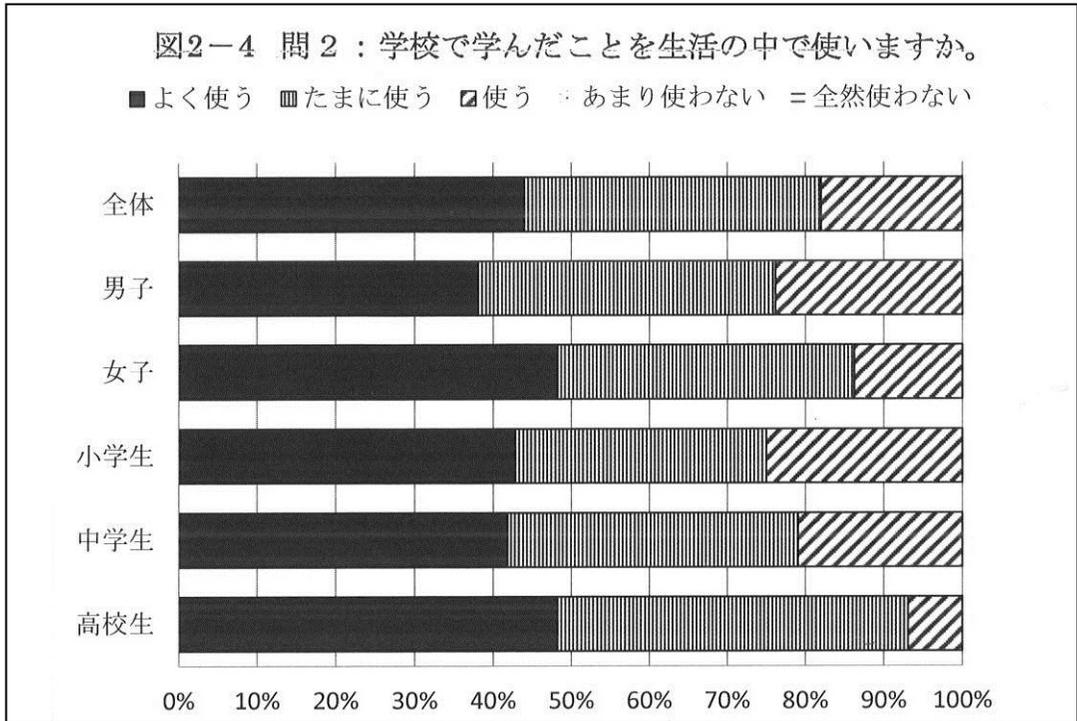
図2-3 問1：この学校の勉強は楽しいですか。



	大変楽しい	楽しい	ふつう	つまらない	大変つまらない
全体	25 (25%)	49 (49%)	23 (23%)	2 (2%)	1 (1%)
男子	9 (21%)	15 (36%)	15 (36%)	2 (5%)	1 (2%)
女子	16 (28%)	34 (59%)	8 (14%)	0 (0%)	0 (0%)
小学生	10 (36%)	11 (39%)	6 (21%)	1 (4%)	0 (0%)
中学生	6 (14%)	22 (51%)	14 (33%)	1 (2%)	0 (0%)
高校生	9 (31%)	16 (55%)	3 (10%)	0 (0%)	1 (4%)

問2. 学校で学んだことを生活の中で使いますか。

「よく使う」	44人 (44%)
「たまに使う」	38人 (38%)
「使う」	18人 (18%)
「あまり使わない」	0人 (0%)
「全然使わない」	0人 (0%)

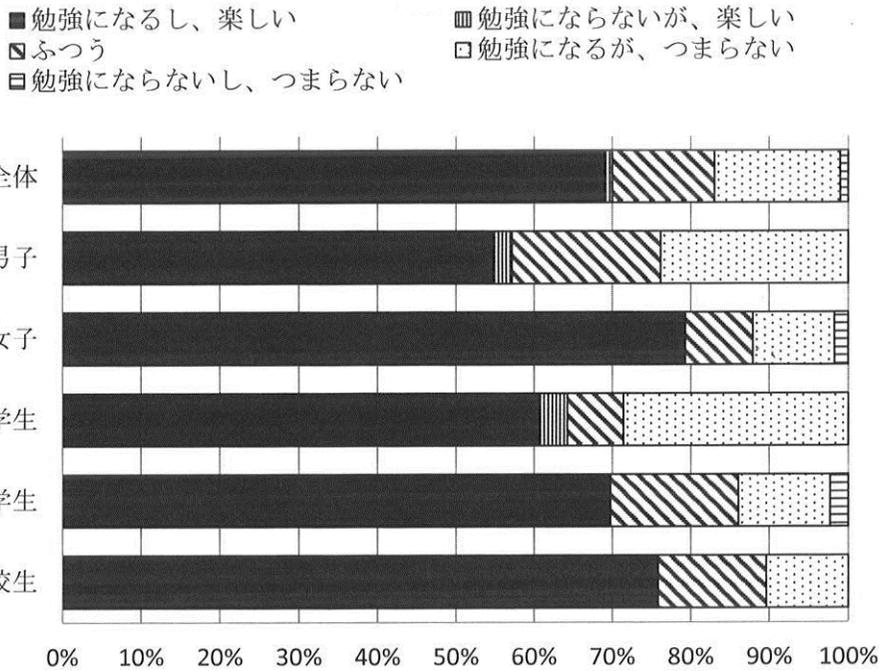


	よく使う	たまに使う	使う	あまり使わない	全然使わない
全体	44 (44%)	38 (38%)	18 (18%)	0 (0%)	0 (0%)
男子	16 (38%)	16 (38%)	10 (24%)	0 (0%)	0 (0%)
女子	28 (48%)	22 (38%)	8 (14%)	0 (0%)	0 (0%)
小学生	12 (43%)	9 (32%)	7 (25%)	0 (0%)	0 (0%)
中学生	18 (42%)	16 (37%)	9 (21%)	0 (0%)	0 (0%)
高校生	14 (48%)	13 (45%)	2 (7%)	0 (0%)	0 (0%)

問3. “人間性の価値”に関する授業をどう思いますか。

「勉強になるし、楽しい」	69人 (69%)
「勉強にならないが、楽しい」	1人 (1%)
「ふつう」	13人 (13%)
「勉強になるが、つまらない」	16人 (16%)
「勉強にならないし、つまらない」	1人 (1%)

図2-5 問3：“人間性の価値”に関する授業をどう思いますか。



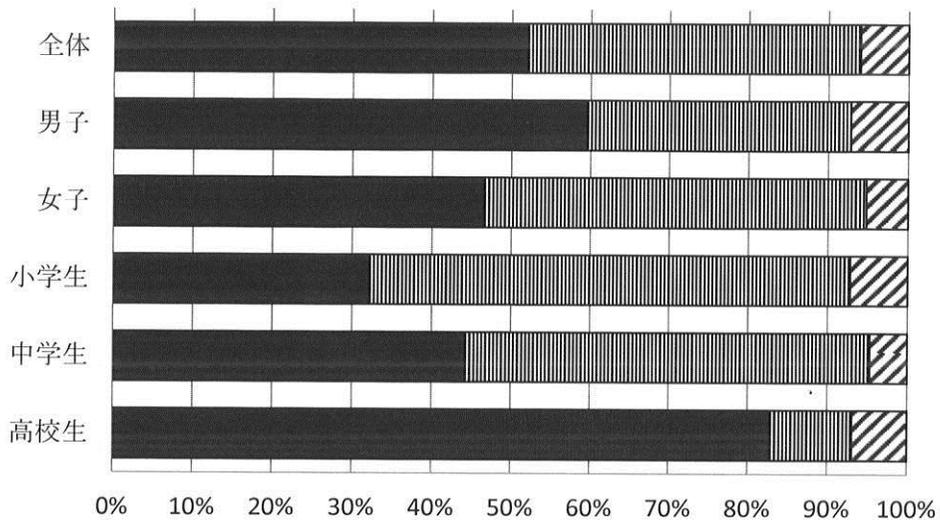
	勉強になるし、楽しい	勉強にならないが、楽しい	ふつう	勉強になるが、つまらない	勉強にならないし、つまらない
全体	69 (69%)	1 (1%)	13 (13%)	16 (16%)	1 (1%)
男子	23 (55%)	1 (2%)	8 (19%)	10 (24%)	0 (0%)
女子	46 (79%)	0 (0%)	5 (9%)	6 (10%)	1 (2%)
小学生	17 (61%)	1 (4%)	2 (7%)	8 (29%)	0 (0%)
中学生	30 (70%)	0 (0%)	7 (16%)	5 (12%)	1 (2%)
高校生	22 (76%)	0 (0%)	4 (14%)	3 (10%)	0 (0%)

問4. この学校でのあなたの友達関係はどうですか。

「とても仲が良い」	52人 (52%)
「仲が良い」	42人 (42%)
「あまり仲良くない」	6人 (6%)
「仲良くない」	0人 (0%)
「友達がいない」	0人 (0%)

図2-6 問4：この学校でのあなたの友達関係はどうですか。

■とても仲が良い ■■■仲が良い ■■■■■あまり仲良くない ■■■■■■■仲良くない =友達がいない



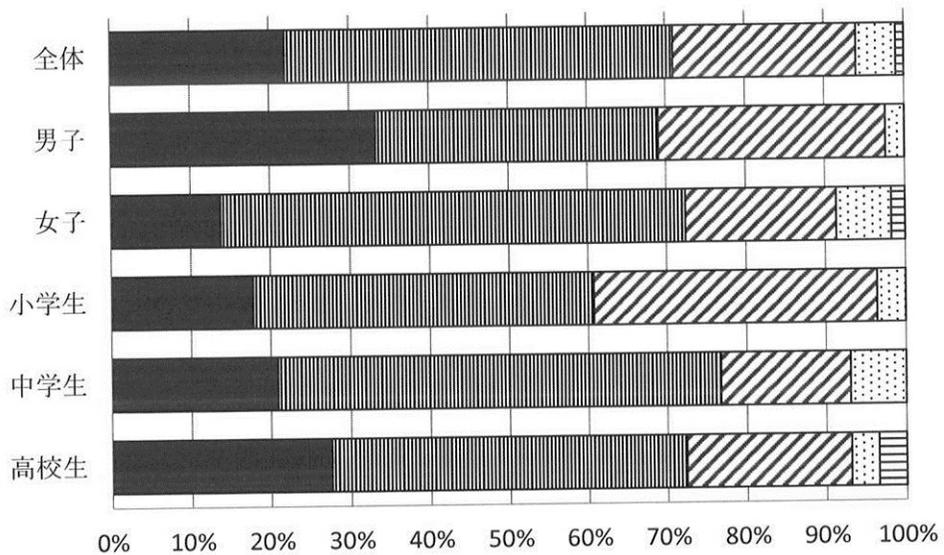
	とても仲が良い	仲が良い	あまり仲良くない	仲良くない	友達がいない
全体	52 (52%)	42 (42%)	6 (6%)	0 (0%)	0 (0%)
男子	25 (60%)	14 (33%)	3 (7%)	0 (0%)	0 (0%)
女子	27 (47%)	28 (48%)	3 (5%)	0 (0%)	0 (0%)
小学生	9 (32%)	17 (61%)	2 (7%)	0 (0%)	0 (0%)
中学生	19 (44%)	22 (51%)	2 (5%)	0 (0%)	0 (0%)
高校生	24 (83%)	3 (10%)	2 (7%)	0 (0%)	0 (0%)

問5. この学校での先生とあなたとの関係はどうか。

「とても仲が良い」	22人 (22%)
「仲が良い」	49人 (49%)
「あまり仲良くない」	23人 (23%)
「仲良くない」	5人 (5%)
「先生が嫌い」	1人 (1%)

図2-7 問5：この学校での先生とあなたとの関係はどうか。

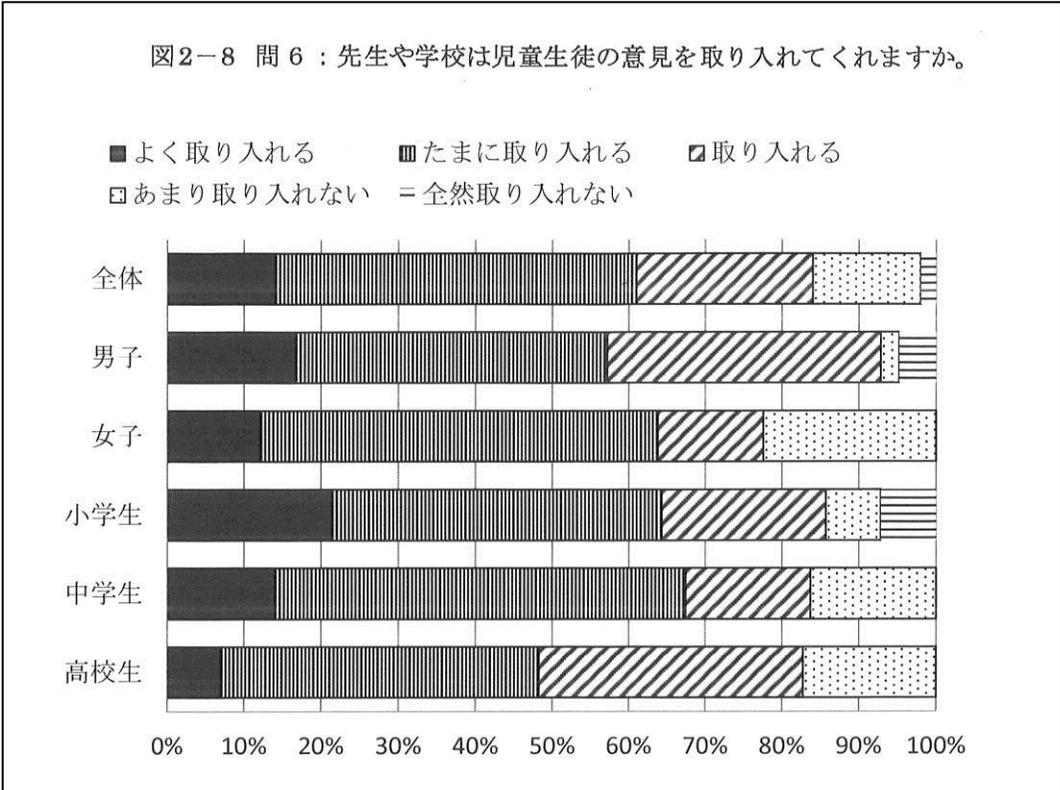
■とても仲が良い ■ 仲が良い ▨あまり仲良くない □仲良くない ◻先生が嫌い



	とても仲が良い	仲が良い	あまり仲良くない	仲良くない	先生が嫌い
全体	22 (22%)	49 (49%)	23 (23%)	5 (5%)	1 (1%)
男子	14 (33%)	15 (36%)	12 (29%)	1 (2%)	0 (0%)
女子	8 (14%)	34 (58%)	11 (19%)	4 (7%)	1 (2%)
小学生	5 (18%)	12 (43%)	10 (36%)	1 (3%)	0 (0%)
中学生	9 (21%)	24 (56%)	7 (16%)	3 (7%)	0 (0%)
高校生	8 (27%)	13 (45%)	6 (21%)	1 (3%)	1 (4%)

問6. 先生や学校は児童生徒の意見を取り入れてくれますか。

「よく取り入れる」	14人 (14%)
「たまに取り入れる」	47人 (47%)
「取り入れる」	23人 (23%)
「あまり取り入れない」	14人 (14%)
「全然取り入れない」	2人 (2%)



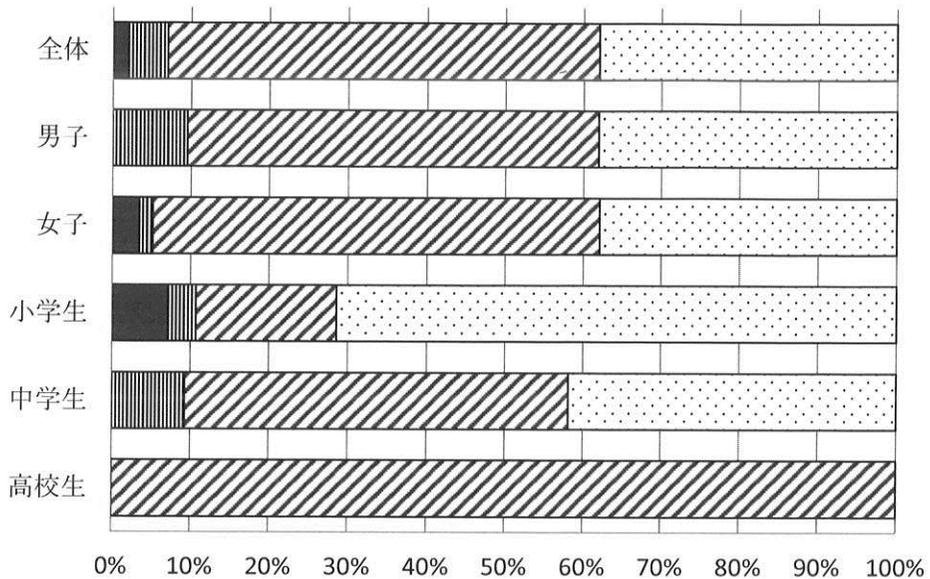
	よく取り 入れる	たまに取り 入れる	取り入れる	あまり取り 入れない	全然取り 入れない
全体	14 (14%)	47 (47%)	23 (23%)	14 (14%)	2 (2%)
男子	7 (17%)	17 (40%)	15 (36%)	1 (2%)	2 (5%)
女子	7 (12%)	30 (52%)	8 (14%)	13 (22%)	0 (0%)
小学生	6 (22%)	12 (42%)	6 (22%)	2 (7%)	2 (7%)
中学生	6 (14%)	23 (54%)	7 (16%)	7 (16%)	0 (0%)
高校生	2 (7%)	12 (41%)	10 (35%)	5 (17%)	0 (0%)

問7. どの学年までこの学校で勉強するつもりですか。

「小学校6年生」	2人 (2%)
「中学校3年生」	5人 (5%)
「高校3年生」	55人 (55%)
「まだ分からない」	38人 (38%)

図2-9 問7：どの学年までこの学校で勉強するつもりですか。

■小学校6年生 ■中学校3年生 ▨高校3年生 □まだ分からない

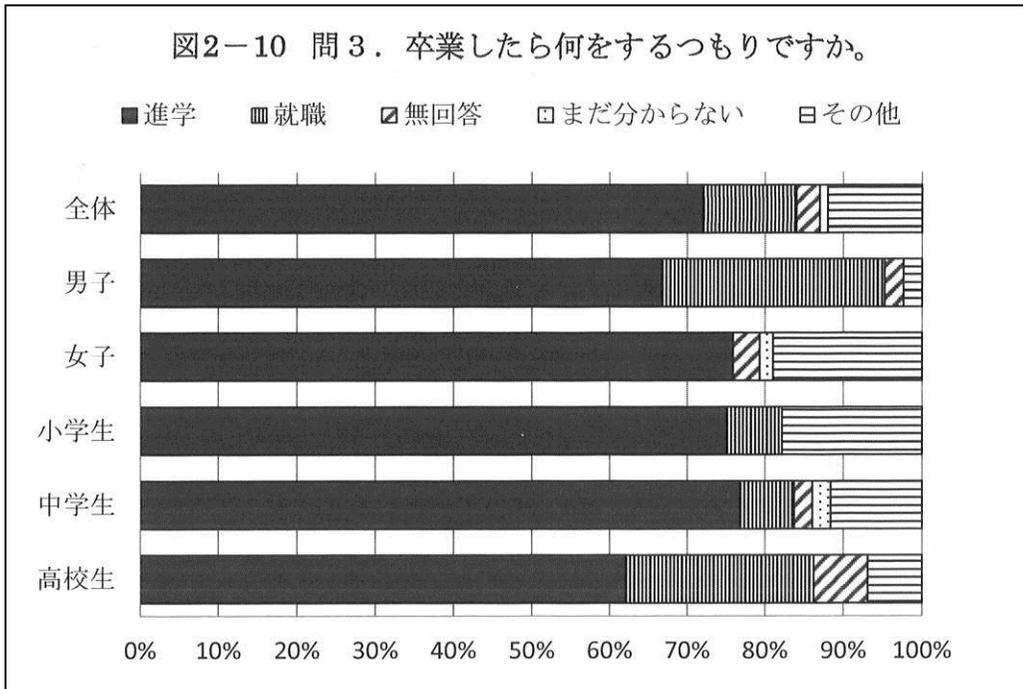


	小学校6年生	中学校3年生	高校3年生	まだ分からない
全体	2 (2%)	5 (5%)	55 (55%)	38 (38%)
男子	0 (0%)	4 (10%)	22 (52%)	16 (38%)
女子	2 (3%)	1 (2%)	33 (57%)	22 (38%)
小学生	2 (7%)	1 (4%)	5 (18%)	20 (71%)
中学生	0 (0%)	4 (9%)	21 (49%)	18 (42%)
高校生	0 (0%)	0 (0%)	29 (100%)	0 (0%)

3. 記述質問

全4問の各質問について、回答者の気持ちや考えを記述式で100人に回答してもらった。問1「毎日1時間目に‘人間性の価値’に関する授業がありますが、何について学んでいますか」、問2「あなたにとって‘人間性の価値’とはどのような意味ですか」に関しては、第3章の「人間性の価値の授業の調査結果」の項で分析するため、ここでは省略する。

問3. 卒業したら何をするつもりですか。	
「進学」	72人 (72%)
「就職」	12人 (12%)
「無回答」	3人 (3%)
「まだ分からない」	1人 (1%)
「その他」	2人 (12%)

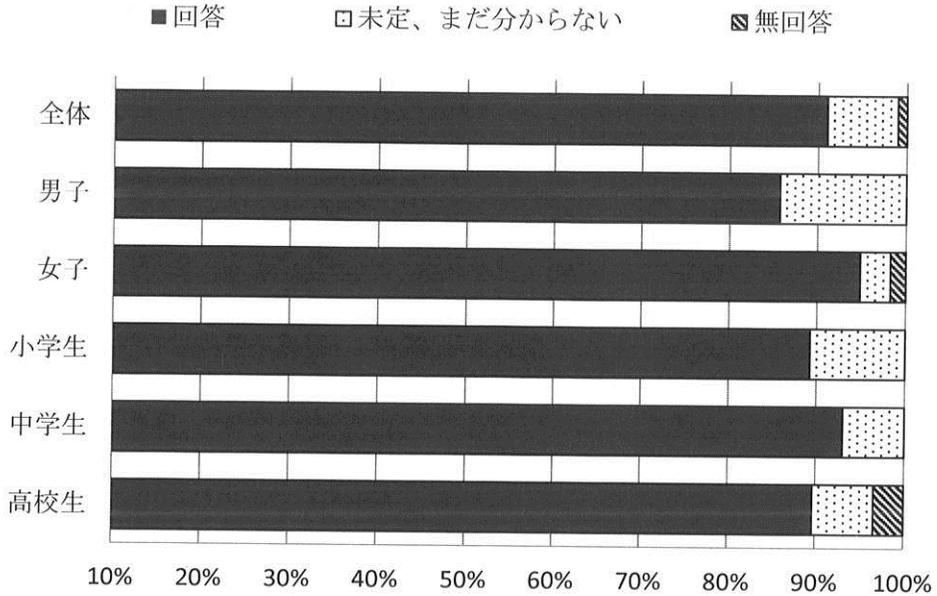


	進学	就職	無回答	まだ分からない	その他
全体	72 (72%)	12 (12%)	3 (3%)	1 (1%)	12 (12%)
男子	28 (67%)	12 (29%)	1 (2%)	0 (0%)	1 (2%)
女子	44 (76%)	0 (0%)	2 (3%)	1 (2%)	11 (19%)
小学生	21 (75%)	2 (7%)	0 (0%)	0 (0%)	5 (18%)
中学生	33 (77%)	3 (7%)	1 (2%)	1 (2%)	5 (12%)
高校生	18 (62%)	7 (24%)	2 (7%)	0 (0%)	2 (7%)

問4. ① 将来の夢は何ですか。

「回答」	91人	(91%)
「未定、まだ分からない」	8人	(8%)
「無回答」	1人	(1%)

図2-11 問4. ① 将来の夢は何ですか。



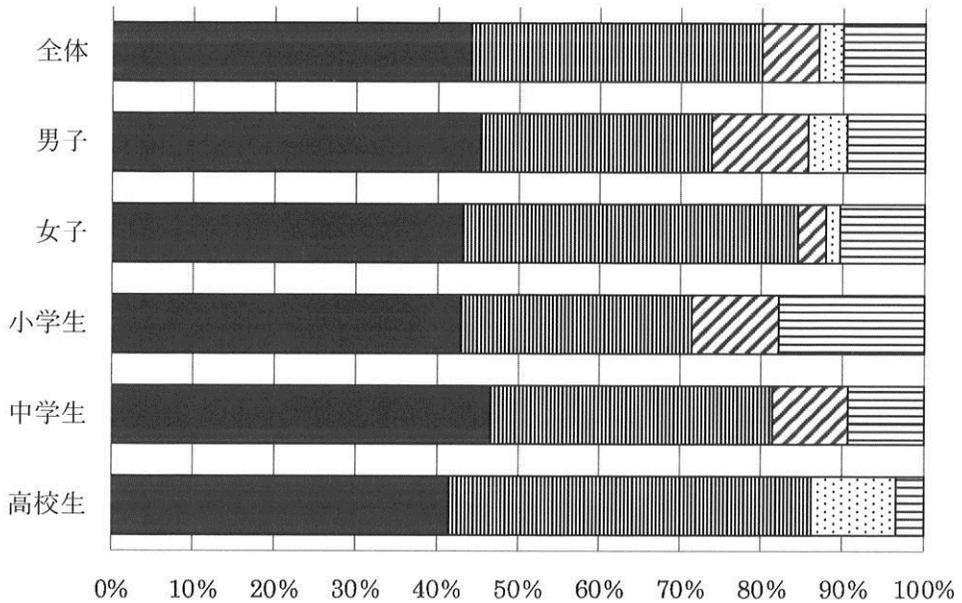
	回答	未定、まだ分からない	無回答
全体	91 (91%)	8 (8%)	1 (1%)
男子	36 (86%)	6 (14%)	0 (0%)
女子	55 (95%)	2 (3%)	1 (2%)
小学生	25 (89%)	3 (11%)	0 (0%)
中学生	40 (93%)	3 (7%)	0 (0%)
高校生	26 (90%)	2 (7%)	1 (3%)

問4. ② どうして将来そうなりたいのですか。

「他人や社会のために貢献したい」	44人 (44%)
「好きだから・得意だから」	36人 (36%)
「分からない」	7人 (7%)
「無回答」	3人 (3%)
「その他」	10人 (10%)

図2-12 問4. ② どうして将来そうなりたいのですか。

■ 他人や社会のために貢献したい ▨ 好きだから・得意だから
 ▩ 分からない □ 無回答
 □ その他



	他人や社会のた めに貢献したい	好きだから・ 得意だから	分からない	無回答	その他
全体	44 (44%)	36 (36%)	7 (7%)	3 (3%)	10 (10%)
男子	19 (45%)	12 (29%)	5 (12%)	2 (5%)	4 (9%)
女子	25 (43%)	24 (42%)	2 (3%)	1 (2%)	6 (10%)
小学生	12 (43%)	8 (28%)	3 (11%)	0 (0%)	5 (18%)
中学生	20 (47%)	15 (35%)	4 (9%)	0 (0%)	4 (9%)
高校生	12 (41%)	13 (45%)	0 (0%)	3 (10%)	1 (4%)

「歌手になりたいです。元気の無い人が幸せになる歌を歌いたいからです」小学6年女子、
「タイ人皆に知識を教える先生になりたい」小学6年女子、また将来の夢を医者とした多くの生徒は、
「病気の人を助けたい。周りの人のために貢献したい」高校2年女子、「軍人、兵士になりたいです。
災害からすべてを、人々を保護する」小学6年男子、「料理を売りたい。誰もが食べることがあります」小学6年男子、「科学者、研究者になりたいです。様々実験科学にと国を助けるためです」中校1年女子、「社会正義のために、法律の仕事」高校3年男子と、このように、「他人や社会のために貢献したい」という内容の回答が44人であった。また10人はその他の回答をし、「両親の仕事を引き継ぎたい」等があった。

第3節 カリキュラムの特色

1. “人間性の価値”の授業 —人間教育の授業—

サッタヤサイ校の教育の目的は「美しい人格をつくる」ことである。すべての授業の目的も同じく全生徒の人格形成を目指している。美しい人格とは何か、次のように定義している。

1) “人間性の価値”の5つの項目

美しい人格は次の5つの項目で表される。1)慈悲・慈愛 2)真理 3)正義 4)平和 5)非暴力、これらの項目が私たちの人生にとって基盤になる人間性の価値といえる。またその他に見られる良い性質はこの5つの項目に分類することができる。理由はこの5つの項目は人類のすべての面における発展に関係しており、私たちが能力を十分に発揮したいと思うなら、この5つの人間性の価値を発展させなければならない。よって学校は、生徒たちの5つの人間性の価値をすべての諸活動や授業を通して育てることを目指す。

この人間教育の授業はサッタヤサイ校が独自で行っているものであり、他のタイの学校には見られない。以下、5つの項目の概要を紹介する。

(1) 慈悲・慈愛 (Love、クワームラック・クワームメッター ความรัก ความเมตตา)

子どもたちにとって慈愛・慈悲が一番大切で基本となる。自分の事愛することができる人間は自分で成長することができる。もし他の人を愛することができるなら、他の人を助けたいと思う。愛は他の人の心を変えることができる。もし自分を嫌っている人にも愛をもって接すれば、相手の自分に対する行動を変えることができる。

子どもたちは、私たちが愛し、愛を受けることを植え付けることができるはずだ。子どもたちは人を愛し、人から愛されることができるよう教えられるべきだ。

人間教育に基づいた学校経営の現状と課題

学校では教員は心の中に慈愛と慈悲を持つべきである。教員が愛情にあふれているときは、子どもたちに何を教えても子どもたちは集中して勉強に取り組み、理解力も向上する。

両親と教師は子どもの人間性の価値の発達に重要な役割を持つ。もし子どもは、十分な愛情を受ける事ができないと、劣等感を持ちながら育ち、自分に自信を持つことができず、暴力的な人間になってしまう。一番大切な価値は、愛と慈悲であり、愛は美しい人格の基礎となる。

(2) 真理 (Truth、クワームチン ความจริง)

真理とは一時的なものではなく、永遠に不変なもの。真理とは本当の幸福の意味だと考える。幸福は人によって違うが、お金などによる相対的な幸福ではなく、絶対的な幸福を子どもたちに教える。

(3) 正義 (Right Action、クワムプラップチョープ ความประพฤติชอบ)

自分が相手にしてほしいことを相手にすること。私たちの行動を正しいものにするには、慈愛・慈悲を根本にしなければならない。なぜなら私たちの心にある利他的な愛は人のために起こす行動の中に現れてくるものだからである。

例えばケンカをしている人が好きではないなら、自分はケンカをしない。教員は、「ケンカをしている人が悪い」と教えるのではなく、好きかどうかを聞き、好きではないなら、しないように教える。

(4) 平和 (Peace、クワームサゴップ ความสงบ)

子どもたちは欲求や怒りなどの感情をコントロールする訓練が必要である。みんなよい部分も悪い部分も持っている。よい部分は太陽の光で、悪い部分は暗闇だといえる。太陽の光が強いと暗闇は見えないが、太陽の光が弱いと、暗闇はかくせない。だから、太陽の光を強くすることを教えなければならない。

子どもたちは、潜在的な意識から怒りや嫉妬、その他の負の感情を起こさないように、理性を育てることを教えてもらわなければならない。座禅を通して、自分の心と行動をコントロールすることを学ぶ。座禅は心を安静にし、記憶力を高めてくれる。よって、冷静に物事を判断することができる。

人間の潜在意識は、大きな力を持っており、潜在意識を正しい方向に訓練すると、記憶力を高め、性格を変え、人生において成功の手助けとなり、健康によい。そして何より、潜在意識は、私たちが人生の真の平和を発見するのに役立つ。平和を生み出す一番大きな原動力は、愛と慈悲であり、愛は美しい人格の基礎となる。

(5) 非暴力 (Non-Violence、ガーンマイビヤッドビヤン การไม่เบียดเบียน)

非暴力ということは、肉体と精神の両方が幸福を感じながら環境と共存している状態である。私た

ちは、環境と一体不二であり、他の人あるいは環境を傷つける時はどんな状況であっても、自分を傷つけていることに他ならない。

人や物に悪い行いをしない。暴力には、考えること、言葉、行動の3つがある。人、動物、自然に対して行ったことは、すべて自分に返ってくる。

もし幸せになりたいのなら、まず他の人を幸せにする必要がある。よってすべての人を愛し、助けてあげるべきである。非暴力とは、人間に対してだけではなく、動物や植物、自然に対しても貫くことである。

言葉は、非常に大きな力を持っているため、両親や教師、保護者など子どもの身近にいる人々はずねに意識することが重要である。一人の子どもにネガティブな言葉を発するとき、その言葉はその子どもの心にいつまでも留まり、気づかないうちにその子の一生に影響を及ぼす。同時に、言葉を発した側にも、その言葉は潜在意識に残り、影響を与えつづける。

以上の“人間性の価値”に関する5つの項目はすべて関連しており、同時に発展していく。サツヤサイ校のカリキュラムは、教育省のカリキュラムに準拠したものであるが、その教育方法は人間性の価値に関する5つの項目にもとづくものである。

2) “人間性の価値”の授業内容

“人間性の価値”の授業は、毎日一時間目に行われる。小学校1～3学年のグループ、小学校4～6学年のグループ、中学校1～3学年の三つのグループに分かれ、各グループの中で小グループをつくる。小学生の“人間性の価値”の授業では、童話や歌を通して、“人間性の価値”について学ぶ。中学生、高校生になると童話ではなく実話を通して学ぶことが多い。例えば、小学生の人間性の価値の授業では、始めに教員が童話を読み聞かせた後、子どもたちに「どう思いますか？」と質問する。子どもたちは挙手で意見を述べる。教員は、子どもたちの意見に対して誉めたり励ましたりし、話し合いをまとめる。

その後、道徳的な歌を振り付けを交えながら歌う。子どもは歌や振り付けの楽しさを味わいながら、音楽と体の動きを合わせることで集中力を養っている。

子どもたちは、童話や物語を聞いたり歌ったりすることで、人間性の価値について自然に吸収したり理解したりしながら学ぶことができる。子どもたちは、授業中の笑顔が多く楽しそうに学習している。教師は、子どもたちの思考を刺激するような質問ができるようにするよう訓練されている。また、子どもたちは自分の意見を述べたり、友人の意見を聞いたりする練習をしている。この学習における教師の役割は、子どもに話をする（教える）だけではない。子どもの学習をサポートする（助ける）役割がある。

高校1年生のクラスでは、相互信頼関係についての授業が行われていた。クラスでペアをつくり、各ペアのうち一人は目隠しをする。各ペアは協力しながらゴールへと向かうという学習である。この

人間教育に基づいた学校経営の現状と課題

活動は、友人と協力しなければなゴールにたどり着くことはできない。こうした経験を通して、他人を信頼することや他人の役に立つことを学ぶ。

社会においては、人のために行動する責任をもたなければならない。この学習は、いわゆる座学ではなく、屋外において体験的に、楽しく学ぶことができるよう工夫されている。

高校3年生では、社会人（学校外部者）との会話（議論）を設けている。社会人との議論は生徒にとって貴重な体験である。今回の授業では、「自分の将来について」がテーマであった。議論の中で一人の学生は、「人間の価値は知識よりも重要である」と述べた。これは、「頭がいい人（知識人）の中には、知識があるにもかかわらず、他者を助けないという人もいる。しかし、人間性の価値がある人は、社会や他者に貢献していくと思う」からであるという。

3) “人間性の価値”の授業の調査結果

生徒は“人間性の価値”についてどのような意味か、学んだことは何か、を知るためここで、第2章第2節で行った質問紙調査の記述質問を問2、問1の順に見ておきたい。

問2. 「あなたにとって“人間性の価値”とはどのような意味ですか。」に対して、次のような回答があった。回答を以下にまとめた。なお、回答者は複数回答できるものとする。

・「人間が知り、持ち、そして行動すべき価値のこと」関連回答 19人

回答例 「人間が知るべき価値のことです」 中学1年男子

「人としての価値を引き出し発揮させることです」 高校3年女子

「人間として生まれた義務と、人間としての真の価値に気づきました」 中学2年男子

・「自分自身が持つ価値のこと」関連回答 29人

回答例 「自分自身の行動、言動、思考から成る価値」 中学3年男子

「自分自身と自身に内在する価値を知ること」 中学3年女子

「皆に具わっていて、使うかどうかは個に依存した価値」 中学3年女子

「無くてはならない重要な価値。もしも、我々すべての人に『人間性の価値』がそなわっているならば、我々の世界は平和に包まれます。我々は『人間性の価値』を持っているので、どんなに高価な物も、私たちの中にある『人間性の価値』に勝ることはありません」 高校2年女子

・「人間らしくあること」関連回答 7人

回答例 「価値ある豊かな人間であること」 中学1年男子

「人間としての価値。本校で『人間性の価値』を教えている事は良い事だと感じていますが、先生が教えるように行動できる生徒は少ないと思いますが、それでも教えられた

ことを自然と吸収して変わっていくので良いと思います」中学1年女子

- ・「自らの人間性の価値を他者や社会貢献に活用すること」関連回答 18人

回答例 「他者と自らのために行動すること。社会全体への貢献を考えること」中学3年女子

「豊かな人間となるための価値。豊かな人間とは、他者を助ける良き市民ということです」中学2年男子

「人間としてもつべき、社会の中で幸福を感じながら共生する価値」中学1年女子

- ・「人それぞれが異なる価値を持つこと」関連回答 4人

回答例 「人それぞれが持つ異なる価値」中学3年女子

- ・「人間性の価値を自分自身に見出し、自他共の得ある行動をすること」関連回答 9人

回答例 「自身が成長し、自己に内在する価値に気づき、その価値を高めていくことです」高校2年女子

「人間は皆に価値を持っています。しかしその価値の発揮方法はそれぞれ違います。私は、我々は皆価値は等しく持っていると思います。それを発揮するには、その価値に自分自身が気づき、どう使うかにかかっていると思います」高校2年女子

- ・無回答 2人

“人間性の価値”の意味として生徒が理解しているものの中で一番多いのは「自分自身が持つ価値のこと」、2番目は、「人間が知り、持ち、そして行動すべき価値のこと」、3番目は「自らの人間性の価値を他者や社会貢献に活用すること」である。筆者はこのように生徒が自分と他人が価値を持って、引き出し、他者や社会のために貢献したいと考えていることは、悪意をもった行動やいじめ問題、社会問題などを少なくし、社会貢献に寄与すると考える。

問1. 「毎日1時限目に“人間性の価値”に関する授業がありますが、何について学んでいますか。」に対して、次のような回答があった。回答を以下にまとめた。なお、回答者は複数回答できるものとした。

- ・「“人間性の価値に関する5つの項目”（慈悲・慈愛、真理、正義、平和、非暴力）」を使用語彙とした回答 28人

回答例 「社会全体の幸福のための行動を、人間関係による幸福感と人間性の価値に関する5つの項目の実践から学んでいます」中学2年男子

- ・「道徳、倫理、哲学」を使用語彙とした回答 23人

回答例 「実生活に活かせる道徳的指向性をもてるようになりました」中学1年男子

「道徳心は深い意義を持つけれど、簡単に行動に移せるということを学びました」小学

人間教育に基づいた学校経営の現状と課題

6年男子

「誠実さと協調性、自己犠牲、責任感」小学6年男子

- ・「自己的発想：自分の考え方を持つこと、自己成長意欲、精神力、自制心」関連回答 26人

回答例 「私たちは何故生まれたのか、何のために生まれたのか、そして何者であるかを学び、また人格者となるための方法を学んでいます」小学6年女子

「(前略) また、幼いころから現在までに、授業を通し自分自身が成長し変わることができました」中学2年男子

- ・「他者的発想：他者理解、学校での勉強を人のために活用すること、社会に還元すること」関連回答 15人

回答例 「先生は生徒が慈愛・慈悲深く、非暴力で他人に心を配り、偏見の無い良き市民になるよう教えています」中学3年女子

- ・「自己・他者の両方面からの発想：豊かな人間性」関連回答 10人

回答例 「行動する前に考えるべき2点、『1. 自分にとって良いかどうか 2. 他人にとって良いかどうか』どちらも具わったときに行動しても良いと学んでいます」高校2年女子生徒

- ・「授業知識の実生活への応用」の関連回答 7人

回答例 「“人間性の価値に関する5つの項目”を学んで、家庭や学校で実行できると感じました」中学2年女子

「人生について学ぶ。私たちの人生が高く価値があるのを知っている。だから、日々生きていくだけではない」中学2年女子

- ・「座禅、読経、祈り」関連回答 12人

回答例 「座禅、自己価値、自己の内面的発見」小学6年女子

- ・「ゲーム、歌、童話」関連回答 6人

- ・無回答 4人

小学生・中学生・高校生見ると、小学生の回答で一番多いのは「座禅、祈り」であり、2番目が「“人間性の価値に関する5つの項目”（慈悲・慈愛、真理、正義、平和、非暴力）」である。

中学生の回答で一番多いのは「“人間性の価値に関する5つの項目”（慈悲・慈愛、真理、正義、平和、非暴力）」であり、2番目が「自己的発想：自分の考え方を持つこと、自己成長意欲、精神力、自制心」となった。

高校生の回答で一番多いのは「他者的発想：他者理解、社会に還元すること」であり、2番目が「“人間性の価値に関する5つの項目”（慈悲・慈愛、真理、正義、平和、非暴力）」という回答である。

小学生は教員から教えられたことをそのまま理解する。中学生は、教員から教えられたことを自らの行動に移すことができるようになってきている。高校生は、自分のことだけ考えるのではなく、他者や社会のことまでも考えるようになってきている。

全体として、生徒は“人間性の価値の5つの項目”を理解し、授業の目的は成功していることが確かめられた。

次いで選択質問の間3「“人間性の価値”に関する授業をどう思いますか。」では、「勉強になるし、楽しい」69%、「勉強にならないが、楽しい」1%、「ふつう」13%、「勉強になるが、つまらない」16%、「勉強にならないし、つまらない」1%で、勉強になると思った生徒は85%、ふつう13%、勉強にならない2%と、ほとんどの生徒は人間性の価値の授業に意義を認めている。

男子と女子を見ると、55%の男子、79%の女子は「勉強になるし、楽しい」と考えており、女子の方が比較的多い。

小学生、中学生、高校生の回答で、一番多いのは「勉強になるし、楽しい」であるが、29%の小学生は「勉強になるが、つまらない」と考えている。

記述質問の間1と間2に関連して質問した間4(①、②)では、間4①「将来の夢は何ですか。」に対して、将来の夢である職業につきたいという回答が91%、「未定、まだ分からない」が8%、また高校生は、無回答者1人を除いて、全員が将来の夢を持っていることが分かった。間4②「どうして将来そうなりたいのですか。」に対して、「他者や社会のために貢献したい」44%、「好きだから・得意だから」36%、「分からない」7%、「無回答」3%、「その他」10%で、「他者や社会のために貢献したい」と答えた生徒は男子、女子ともほぼ同じ割合であった。小学生、中学生、高校生とも一番多いのは「他者や社会のために貢献したい」となった。これは、記述質問の間1と間2と同様である。

生徒は自分と他人が価値を持って、引き出し、他者や社会のために貢献したいと考えている。将来の仕事にも他者や社会のために貢献したいと回答している。

2. “人間性の価値”に関するすべての授業

人間性の価値を理解するには、“人間性の価値”の授業で教えることだけでは十分とは言えない。授業の内容や指導方法を通し、すべての科目、すべての活動において人間性の価値を教えていかなければならない。

1) Educare について教え方

教育という単語の語源はラテン語の「Educare」であり、「引き出す」という意味である。生徒の良い部分を引き出すことが教育の本来の意味であるとも捉えることができる。人間の価値は外から与えられるものではなく、人間の内から出てくるものであるといえる。

サッタヤサイ校の創立者アットオン・チュムサイナアユッタヤによれば、教員が説明することで内

容を教えるという方法ではなく、生徒自身が考えるようにすることで、人間性の価値を教えていく必要があるという。サッタヤサイ校の教員は、生徒に自分自身で考えるよう奨励し、教員の質問に対し、生徒が答えたりアイデアを出したりするような創造的な方法で教えている³⁰。

自分の価値を引き出すためには、自分自身のことを知る必要がある。「自分自身を知る」とは、外見的事物だけでなく、自身の心や潜在能力を持っていることを認識するということである。自分自身の潜在能力を知った生徒は、あらゆる面で成長していくことができる。これは、真に幸福な人生につながることを意味している。そして、学校は、子どもたちが幸せになるために支援すべきである³¹。

子どもたちは、どうすれば幸せになれるかを学び、学校は、子どもたちに人生の価値を教え、どんな問題が起こっても幸せになれるようにする必要がある。これは非常に重要なことである。なぜなら、そうした経験や学びは苦難を乗り越えようとする力になるからである。

アットオン博士は、自分自身にも、自分の周りすべてのことにも価値があるとし、教員は生徒に自分以外の他のものの価値について考えさせ、それに気づかせるような支援をしていく必要があると述べている。

例えば教員が、木の下に座って、

教員：木の良いこと（価値）は何ですか？（子どもたちが考える）

生徒：木は皆に日陰を提供します。涼しくなります。

教員：木は金持ちや頭がいい人だけに日陰を提供しますか？

生徒：いいえ、誰に対しても同じです。

教員：木から何を学びますか？

生徒：私たちは木のように、この人やあの人というだけでなく、誰に対しても手伝おうと思います。

また、木には良い事がたくさんあるので、木を守りたいと思います³²。

というように木について教えながら生徒に質問する。授業だけでなく、このような何気ない教員と生徒の触れ合いの中でも、「人間教育」が行われている。

教員はすべての生徒一人一人が潜在的な価値を持っているという強い信念を持ち、小さな子どもに対しても人間性を尊重する必要がある。教員がこうしたことを自覚しているとき、生徒は潜在能力を引き出し、より多くのことができるようになるであろう。生徒であっても、ボランティア等を通して社会に貢献できることも確かである。教員は、すべての生徒が潜在能力を発揮していけるようにするため、生徒の得意な部分を誉め、励ますことも必要である。例えば、勉強があまり得意ではないが、

³⁰ Dr.Art-ong Jumsai Na Ayudhya, *Kunnatham Num Khwaanru* คูณธรรมนำความรู้ (『知識より道徳』), Freemind Publishing, 2010, p.139.

³¹ *Ibid.*, p.139.

³² *Ibid.*, p.47.

スポーツが得意であるという生徒に対して、得意とするスポーツを生かせるように支援していくことで、その生徒の潜在能力を引き出せることもある。

2) 授業の事例

人間性の価値は、すべての科目において教えられなければならない。すべての科目は、人間の生活の一部であり、各科目の中に人間性の価値がある³³。

授業において教員は、生徒に対して「善い人間になれるように」教えるべきか、もしくは「試験問題を答えられるように」教えるべきか、どちらのように教えるべきであろうか。

後者は、生徒に問題を回答する能力を育てることができても、〈善さ〉を培うことができていないという可能性がある。人間性の価値を教えようとするのであれば、人間性の価値の授業だけではなく、すべての科目において教えられなければならない。

「どのように考えるか」で「どのような人間になるか」が決まる。教育は「善い人間になるための考え方」を子どもに教えるべきである。

私たちには、他の人よりも自分が上に立とうとする考え方は必要ではない。必要な考え方は、他人の苦しみをどう解決するか、他人を幸福にするためにどうすればよいかというものであり、これは、社会に求められている考え方でもある³⁴。

子どもが「善い考え方」をすれば、善い潜在意識がつくられていく。そして、善い潜在意識は、善い行動を生むのである。

このような人間教育を知り、そうした教育を行いたいと望む教員もいる。しかし、1時間の授業は50分という時間的な制限もあり、実際に行うことが難しいという状況がある。これについて、校長の顧問³⁵であるタッサニー・トンソム氏にインタビューを行った。筆者は、「授業の時間は50分ですが、50分という時間の中で、どのようにして教科書の内容と人間性の価値を一緒に教えるのですか。」と質問した。

時間は限られているが、柔軟に教えることができる。人間性の価値は、いつでも授業に取り入れることができる。教科書の内容を教えるだけでは、子どもが考えていないし、楽しんでもない。教科書の内容を教えるときに、有名な人の伝記や童話やゲームを通して教えることができる。それを教えながら子どもたちが質問したくなるように促す。よく発言することは、よく考えることである。教師はそれらの発言を聞くことで、生徒の成長を知ることにもなる。サッタヤサイ校は、教科書を中心とするのではなく、子どもの人生を中心としている。

³³ *Ibid.*, p.150.

³⁴ *Ibid.*, p.83.

³⁵ 「サッタヤサイ校の校長の顧問」は、校長職を前任し、学校の教育課程の責任者でもあったが、現在は博士号取得のため校長職は休職し、新任の校長のアドバイザーとして勤務している。

人間教育に基づいた学校経営の現状と課題

人間性の価値を教えるには、様々な方法がある。例えば教員は、「科学では、私たちが、地球環境問題のより良い理解を持つことになります。そして皆のために私たちの世界を住みよい世界を作るための方法を見つけるのに役立つ」、社会科では「世界の様々な文化を学び、私たちは文化の違いを理解し、尊重します」といった発言をしている。また、算数の授業では、加法を教える際には、

$$1+2+3+4+5=15$$

$$2+5+4+3+1=15$$

$$1+4+5+2+3=15$$

を提示し、目的に至るためには、単一の方法だけではなく、いく通りかの方法があることを示し、それらを選択できるとする。このことを通して、それぞれのあり方を理解し、他人の意見を尊重することを教えている。

課外活動では、ボランティアを通し、地域社会に貢献し、植林など有用な活動を行い、クラブ活動では生徒の関心にもとづき、生徒の様々な可能性を見出している。

また、それぞれの授業の中にストーリーテリング、ゲーム、歌、ロールプレイなどを行うという方法もとられる。

3. 生徒の相互理解と協同学習

1) 生徒の協同学習

サッタヤサイ校では、多重知能理論に基づき協同学習を行っている。各グループにおいて、生徒同士助け合いながら学習している。協同学習では、「科学は得意であるが美術は得意ではない」という生徒と「科学は得意ではないが、美術が得意」という生徒とが、グループ内で共に活動することで、お互いに教え合い学び合うことができる。また、議論やブレインストーミングをしながら慈愛やお互いに助け合うことなどの「人間性の価値」を引き出すことができる。

これについて、タッサニー・トンソム氏にインタビューを行った。

本校の子どもたちは多様であり、様々なニーズを持っている。しかし、寮生活をしているため、もし子どもたちがもっと学びたいという場合は頻繁に教員にそれを要求することができる。教員はクラスをグループに分けることで、その科目が得意な生徒が、あまり得意ではない生徒に教えたり助けたりすることを促している。教員と生徒、生徒同士で学ぶことにより、共に成長していくことができる。また、あまり勉強が得意ではない生徒が、友達から励まされることによりクラスの学習の雰囲気がとても良くなることもある。協同学習を経験した卒業生の進路をみると、全員が全員、頭がいいという訳ではないにもかかわらず、すべての生徒が大学に入学していることから「学習の雰囲気が良い」ということがいえるであろう。学習は、友達と競争するものではなく、楽しいものであり、自分自身を成長させ、自分自身と競うことであると捉えるとき、全

員が共に成長していくことができる。

また、高校2年生へのインタビューの結果、「この学校には小学校1年生から来た。入学当初から楽しく、たくさんの友達がいる。家の近くにも（学校外にも）友達がいるが、寮生活をしているためか、今は学校の友達の方が仲が良いと感じる。でも、仲良くなるまでは、学校の友達となかなか理解し合えないということもあった。その都度よく話をして理解できるようになってきた。今は友達との問題は無く、けんかをしなくなった。この学校では、共に学んだり共に本を読んだりしながら、お互い助け合っている。友達との競争が無いため、さほどストレスを感じていない。友達とお互いに励まし合っている。これは、他の学校では見られない友達関係である。他校の友達は、私より知識や成績は良いが、大きなストレスを感じているように思う。試験の時には友達と競争しているようだった。」という発言が得られた。

この高校生が感じていることには、協同学習が関係していると思われる。協同学習には常に友達関係があるからである。筆者が実施した質問紙調査の選択質問の間4「この学校でのあなたの友達関係はどうか。」の回答結果を見ると、52%の生徒が「とても仲が良い」、「仲が良い」が42%、「あまり仲良くない」6%であり、「仲良くない」「友達がいない」は0%であった。男女別でみると、男子の「とても仲が良い」が60%、女子は47%である。教育段階別にみると、学年が上がれば上がるほど「とても仲が良い」という回答率が高くなる傾向にある。これは、サツヤサイ校での「お互いに助け合う」という教育を受ける期間が長くなるほど、友達との関係が良くなるという結果を表しているのではないかとと思われる。筆者は、この回答結果から、本校では、いじめの問題が少ないであろうと感じた。また、学校は「小さい社会」である。その中で良い友達関係を築くことができれば、卒業後の社会においても良好な人間関係を築くことができるのではないかと考える。

2) 総合的な学習の授業

人は普段の生活において、「科目」に分けて生活している訳ではない。実生活では、すべての科目が混在しているといえる。サツヤサイ校では、生徒に対して「人間性の価値」を知るために良いとされるものは、すべての科目に取り入れられ、各科目との関係性も教えられているため、学習そのものが生活に関連しているという³⁶。

サツヤサイ校では、すべての学年において週一時間、「総合的な学習の授業」が行われている。「総合的な学習の授業」において、教員は、生徒が聞くだけでなく、自ら協同的な活動に取り組むことができるように授業の計画を立てる。生徒は、自分で興味を持ったことについて学習する。生徒が興味関心のあることについて学習することは、学習意欲を高めることになる³⁷。教員は、生徒の興味が

³⁶ *Ibid.*, pp.171-172.

³⁷ *Ibid.*, p.173.

何にあるかを踏まえ、ミーティングをする。生徒が学びたいことに関係する科目の教員がその生徒に対し、何を教えるか、どのように教えるかを定める。また教員は、計画した授業の中で、科目の学習内容だけではなく、「人間性の価値」も学べるようにしている。

「総合的な学習の授業」は、すべての科目の教員がチームとなり、共に働く機会ともなる。さらに、生徒にとっても、生徒同士が協力しながら共に学習する機会となり、そこでは様々な学習・活動が行われるため、生徒は楽しみながら学ぶことができるであろう。

また、「総合的な学習の授業」は主に教室の外で行われる。教員から知識を教えられる(与えられる)のではなく、自ら能力を引き出し、生徒自身が「新しい発見」をする学びとなっているといえよう。

筆者が実施した質問紙調査の選択質問の間2「学校で学んだことを生活の中で使いますか。」の回答結果は、すべての生徒が、学習したことは実生活に使えると回答している。なお、男女別の回答をみても、差は見られなかった。特に、高校生の回答は、「よく使う」、「たまに使う」という回答が93%と高い割合を示した。高い割合を示した理由として、筆者は、「総合的な学習の授業」での学習を経験していることが大きな要因ではないかと考えた。なぜなら、「総合的な学習の授業」を通して生徒は考えることを学び、学習したことを生活に関連づけようとする活動を経験しているからである。学習したことが実生活に活かせることを理解したとき、生徒の学習意欲が高まる。「総合的な学習の授業」では、生徒の興味関心に合わせ、知りたいことを学ぶための「方法」を学ぶことができる。学ぶ方法を知った生徒は、生涯にわたって学習していくであろう。

また、質問紙調査の選択質問の間1「この学校の勉強は楽しいですか」の回答結果から、74%の生徒が学校の勉強が楽しいと感じていることが分かった。「総合的な学習の授業」では、生徒はそれぞれの興味関心に沿って学習している。この授業を通して、教員の話聞くだけでなく、自分で調べ方を考えたり、自分で足を運び関係者に質問したりするような活動を体験している。こうした「総合的な学習の授業」が学習を楽しく感じさせる大きな要因となっているのではないだろうか。

第3章 人間教育に基づいた学校経営の現状と課題

第1節 学校経営

1. 学校経営の理念と思想

校長であるラッター・ジュンラウォン氏に学校経営についてインタビューを行った。

本校の学校経営においては、一つの学校経営理論ではなく、様々な学校経営理論にもとづいている。学校経営は、一つの学校経営理論に基づくだけでは足りず、多くの教育理論を必要とする。その中でも一番大切な学校経営理論は、「模範」である。「模範」とは、校長職に就く者は「こういう教員になってほしい」と願っている教員像に、校長自らが「模範」とならなければならないと考えることである。これは校長と教員という関係だけではなく、教員と生徒の関係も同じである。私は、創立者のような「教師」になりたいと思い、今も懸命に自分を成長させようとしている。

また、他者（同僚教員や職員）を愛することや理解すること、他者を尊敬し価値を認めることが大事である。この3つ（愛すること、理解すること、尊敬し価値を認めること）ができれば、他者は一生懸命働くようになる。また、他者のやりたいことについては、学校全体で支援する。

つづいて、学校の創立者であるアットオン博士に、学校経営についてインタビューを行った。

学校の目標を果たすためには、学校経営全体として目標に向かわなければならない。「善い人間」をつくるという目標であるならば、学校経営者自身が「模範」となって「善い人間」にならなければならない。そして、生徒だけではなく、学校で働く全教職員も「善い人間」にならなくてはならない。このサッタヤサイ校の人間教育は、カリキュラムだけではなく、学校経営全体が人間教育にもとづいている。人間教育にもとづく学校経営には、自分が成長し、よい「模範」となること、他者を愛すること、理解すること、尊敬し価値を認めることも含まれている。

2. 学校経営の形態

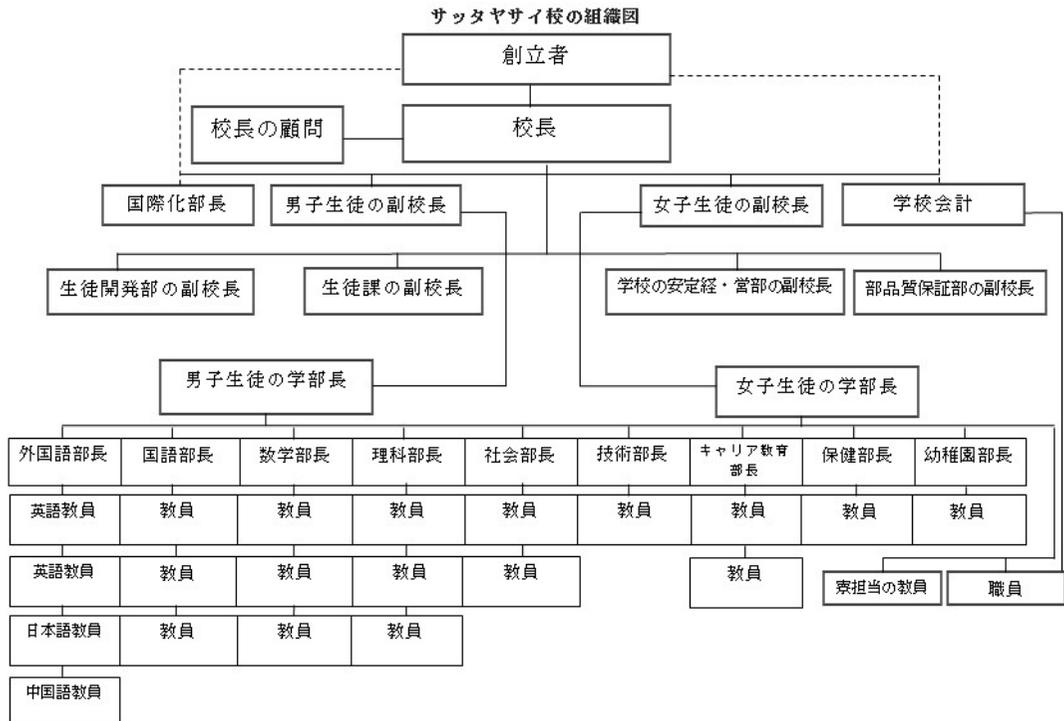


図 3-1 サッタヤサイ校の組織図 (サッタヤサイ校「学校要覧」、2013)

サッタヤサイ校は参加型の学校経営(Participation)である。学校で問題が起きた場合は、学校全体で協同してすぐに解決するために協力する。

いじめ問題に対しては、教員はいじめ問題を解決するために、「いじめはダメだ」と教えたり、罰を与えるのではなく、童話を読み聞かせたり歌を歌ったりしながら、いじめについて指導している。何か問題があるときは学校全体が協力し、授業を通してその問題を解決しようとする。いじめの問題が起こったときは、1週間の間、授業で“愛”について教えた。

例えば、「人間性の価値」の授業で、教員は「私たちは愛と思いやりをもち、他の人を助けよう」という言葉を生徒たちと一緒に復唱し、メロディーをつかって歌を作った。声に出し、歌うことを通して、この言葉が自然に心の中に入ってくる。

また、算数の授業では、「 $32 \div 8 = ?$ 」ではなく次のような文章問題で学習した。
 「私をとっても愛するお母さんがお菓子を 32 個買ってきてくれた。その日、友達が 7 人家に遊びに来ていたので、大好きな友達に同じ数だけお菓子を分けてあげたい。みんな同じ数なら、一人のお菓子は何個になるだろうか」

サッカーの授業においては、以下のように学習した。

教員：11人のプレイヤーのうち、一人だけがプレーをして勝つことはできますか？

生徒：できません。チームワークを大切に、お互いに助け合うことで勝つことができます。

教員：もし私たちの社会を幸福にしたいのなら、どうすればいいですか？

生徒：サッカーのようにみんなが団結して助け合い、愛し合うとき、社会は幸福になる。

このような授業を1週間続けた結果、いじめの問題は解決した。他の学校では、いじめの問題を起こした生徒を退学させるだけかもしれないが、この学校では「すべての人が良い面と悪い面を持っており、良い面を引き出して悪い面を直すことができる」と信じている。

以下の表3-1は、サッタヤサイ校と一般的な学校との学校経営の違いを比較した。

表3-1 サッタヤサイ校と一般的な学校との学校経営の比較

サッタヤサイ校	一般的な学校
1 学校経営者は、教職員に指導し、共に活動する。	1 学校経営者は、教職員に指示を出し、従わせる。
2 組織構造はピラミッドカットトップ型である。教職員が各グループに分かれ、各グループが権限や責任を負う。学校経営についての意見が上から下、また下から上の双方向で行き交う。そして、各グループでも連携を取り合っているため、対応がより速く、より正確である。	2 組織構造はピラミッド型である。権限や責任はトップが持ち、上から下へ指示が出る。そのため情報が不正確であったり、上から下へのプロセスが長く、情報の流れが遅い。
3 教員一人一人の専門性が重要である。	3 法やルールに従順である。
4 学校経営における意思決定はメンバーの参加により行われる。	4 学校経営者は、教育省などの上からの意見に従う。
5 学校の文化は家族的で暖かい。安全でフレンドリーな雰囲気。相互扶助の関係がある。	5 機械的な文化。自己優先的で、人間関係が仕事上の関係に留まる。

(出典) Chatchawan Chumnarn, *Kaanbariharn Granbookkon Pey Patiroop Kaanreanroo Nai Rongreang Sathya Sai Changwat Lopburi* การบริหารงานบุคคลเพื่อปฏิรูปการเรียนรู้ในโรงเรียนสัตยาไส จังหวัดลพบุรี (「Personnel management for learning reform at Sathya Sai school in Lopburi province」) Uttaradit Rajaphat University, 2007, Table3, pp.154-155.

3. 教員の採用と研修

サッタヤサイ校の教員数は約50人、幼稚園から高校3年生の生徒数は350人である(2013年度現在)。教員一人に対し、生徒が7人という割合になる。サッタヤサイ校では、教員が最も重要であると考えられているため、サッタヤサイ校に適切な教員を採用しているとする。

人間教育に基づいた学校経営の現状と課題

筆者が実施した創立者と校長へのインタビューによれば、サッタヤサイ校では、教員採用のための委員会を設立し、教員採用の方針と方法を規定している。

空いたポストがあれば、学校のウェブサイトや大学に求人情報を掲載する。サッタヤサイ校は、申請者を2泊3日の日程で招待する。部屋や食事はサッタヤサイ校が負担する。

初日は、まずオリエンテーションがあり、学校について（教育目的、ビジョン、思想、目標）紹介する。つづいて、面接がある。通例、初日で約50%の申請者が「この学校の生活に合わない」と感じて、棄権するという。

二日目には、申請者に対し、良い教員になるためにトレーニングが行われる。教員の役割は、模範となることであるため、例えば生徒に教えることは教員も守るといったことを教える。このトレーニング後には、さらに50%の申請者が棄権するという。

最終日には、申請者は模擬授業を行う。模擬授業では、サッタヤサイ校の生徒も参加し、実際の授業のように行われる。

教員採用委員会は、模擬授業での生徒の様子を見る。生徒がどの申請者が好きかを見るのである。生徒は「慈悲・慈愛」がある人を感じることに長けており、申請者のうち、「慈悲・慈愛」を高く感じられる場合、生徒はその申請者ともっと話したいと思ったり、傍に寄ったりする。生徒は各申請者についてどう思ったかを教員採用委員会の担当者に伝える。この方法には、生徒が自分の教員を自分で選ぶ機会がある。生徒の意見も尊重され、生徒の意見と教員採用委員会の意見とが採用に関する判断材料となる。そして、最終日の午後には採用結果を発表する。

サッタヤサイ校の採用方法は競争力のある試験や学力の成績に焦点を当てた一般の学校とは異なっている。生徒は選択プロセスに関与しているため、自分のために学校が良い教員を採用するのが分かっている。この方法で採用した教員は一生懸命教えて、世話をする良い教員として重んじられ、敬意をもって教員と学ぶことを熱望する。

教員の育成について

教員の育成について、校長であるラッダー・ジュンラウォン氏にインタビューした。

学校の目標を達成するためにすべての教師が、人間性の価値に関する話題を全教科におりこんでいくところが、他の学校とは異なる。新しく来た教員には、“人間教育の学び方や教え方”を説明し、新任教員の理解を得ることができたら、先輩教員と一緒に仕事をしながら、先輩の姿から学び取ってもらい、毎日の生活を通して、人間教育についての理解を深めてもらう。そして、教材に人間性の価値をどう含めて生徒たちに教えていくかを考えてもらう。

これは、教員たち自身が切磋琢磨して学習する方法だと言える。学校では毎週会議を開き、学校で

起こっている問題をどう対処して行くかについて話し合いを持つ。学校は教員を採用する時、その人物の能力で評価を決めるのではなく、人間として良い人かどうかで採用を決定し、採用後はその人物の教員としての能力を高めることを支援していく。

長期休暇中、学校は教員たちが研修に参加したり、教員向けの学習コースに参加できるようサポートする。これは、教員たちに専門外のことも幅広く知識や教養を身に付けてもらい、子どもたちの成長に貢献することができるようにするためである。もし教員が自分の興味のある研修に参加したいのであれば、校長に報告して承認を得ることでその研修に参加することができる。

生徒が学校の規則を守らないとき、教員は生徒が理解してくれるように言葉で注意する方法を使う。教員がミスをしたときも同じく、暴力を使ったり、怒鳴ったり、減給するなどの方法を使うのではなく、言葉で注意する方法を使う。例えば子どもを罰するときも学校は暴力を使うことは許さない。暴力を使用しても子どもはおびえるだけで、子どもたちに何も教えることはできず、子どもたちを変えていくこともできない。しかし、愛情をもって子どもと接するときは、子どもは悪いことをしたことを素直に理解する。以前に体罰によって子どもの行いを変えることができた経験を持つため、暴力は子どもを変えることができるという考えを未だに捨てられない教員も存在する。思わず体罰を使ってしまった教員がいた時には週会議でこのことについて話し、教員には自分で打ち明けてもらう。教員が失敗したとしても、その教員にはいい面がたくさんあるので、その教員を 尊敬し、少しずつ改善できるように努める。

生徒の良い模範としての教員の役割

知識と能力を持った人物として生徒の良い模範になれるよう、学校は常に教員が向上するように努め、教員一人一人に成長していくことを促す。

生徒を良い人間に変えていくには、教員の感化が必要である。教員は生徒の心に入り、心に響く言葉を発することができるよう心掛け、教員は自分の言葉に自信をもって話し、自分が教えたことを教員自身も実行するよう努めなければならない。

教員は生徒がモラルを高めていくために非常に重要な役割を持っており、言葉で説明したり教えたりする必要がない時もある。例えば、教員は毎日、授業の始まる少し前に教室に入るよう心掛けると「時間を守る」ということを身をもって示していくことができる。教員は教室に入るとき、生徒たち全員に対して笑顔心をかけると、生徒たちから笑顔を引き出すことができる。

他の学校と比較して給料も高くなく、全寮制の学校のため責任や労働時間が多いにも関わらず、多くの教員はサツヤサイ校で長い年月働き続けている。インタビューを通して得た、教員たちがこの学校で働き続ける理由を以下の3つに要約する。

人間教育に基づいた学校経営の現状と課題

- (1) この学校に来る前と現在の自分を比較すると、自身が内側からいい方向に変わっていくことができていると感じる。感情や心の落ち着き、視野などのすべての面においても、いい方向に伸ばす機会があり、自身を成長させていくことができる。研修に参加したり、より高いレベルを目指して学んでいくこともできる。
- (2) 学校の成功は子どもたちの姿に反映される。数年間生徒たちの顕著な成長を間近で見ることができ、この学校のシステムは生徒たちを価値のある人間に育て、社会に出てからも幸福に生活をし、社会で活躍できるということに確信を持ったので、他の学校とは違うこの学校で働き続けたい。
- (3) この学校で働くことに幸福を感じる。その幸福は物質的なものではない。ここでは家族のように暮し、みんな兄弟のようで、問題があると話し合い、お互い自然に尊重しあって助け合うことができる。また、教員同士の役職争いもなく、ここで役職の高さは名聞名利ということではなく、もっと仕事ができるようになり仕事量が多くなることを意味するだけである。

初任給は他の学校と同じくらいの額だが、学校の経済状況が芳しくないため昇給は難しい。教員たちは給与や待遇ではなく、奉仕の心を持ってこの学校で働いているため、このような教員は探しても中々見つけることができないと、学校は教員に対して感謝の念を抱いている。

つづいて、生徒（高校2年）へのインタビューでは、「この先生方は愛情があり、みんな仲が良いです。私たちは誰が先生で、誰が学校のスタッフであると分け隔てたりしません。みんな家族のように話します。もし大きな問題があるときは、母親に電話をし、先生や友達に相談します。例えば問題を解決することができなくても、そばにいてくれるだけで暖かさを感じます。」と発言している。

質問紙調査の選択質問の間 5「先生との関係」の結果を見ると、小学校、中学校、高校と学年が上がるにつれて、「仲が良い」と答える割合が増えている。教員という時間が増えるにつれ、教員との絆も深まるためだと考えられる。

しかし高校生の女子が1人、「先生が嫌い」と答えており、一人だけであるとしても、この問題は学校で解決されないといけないと考える。

4. 職員と学校スタッフの協力態勢

ここでいう学校スタッフとは学校で事務的な手続きや掃除、食事作りをしているスタッフのことを指す。サッタヤサイ校のスタッフは47人であり、スタッフの管理にも人間性の価値を主軸とする。すべてのスタッフは学校の政策と目標を理解するために研修を受け、自分の業務をこなすと共に自身自身を向上させ、生徒たちが学校の目標を達成できるように支援していくことが求められる。

この学校のスタッフの特徴は、責任感があり、生徒たちを自分の子どものように面倒を見てあげ、仕事に情熱を持ち、学ぶことと教えることに協力し、教育の重要性を十分認識していることである。自分自身の業務に従事するだけでなく、子どもたちに対しては教員の役割も務める。例えば、給食調理員は家庭科の授業でお菓子作りを教えたり、学校の農場で働くスタッフは、農業の授業で米の植え方や野菜の育て方を教えたりする。このようにして生徒たちは熟練した技術を持った人から直接教授してもらい、実際に体験することができる。また、学校スタッフも子どもたちに教える機会を持つことにより、自分に誇りを持つことができる。

スタッフは学校周辺の地域に住んでいる人たちであり、技術を持ち、地域の住民や団体と連携をはかって学校の発展のために働く。地域の人たちを従業員として雇うことは、地域貢献にもつながる。生徒たちが興味のあることに対して、スタッフは地域からその技術を持っている人に連携をとって学校に招聘することも多い。スタッフや専門家が地域から招かれて知識を伝えることは、学校と地域の交流を生み、生徒は地域の人たちに好意をもち、知識を伝える側も生徒に好意を持つことにつながり、学校と周辺の住民の良好関係にも発展していく。

学校スタッフ（女性）へのインタビューでは以下のような発言があった。

私はこの学校の卒業生です。卒業して大学に進学した後も、この学校はいつも連絡をくれて現在の状況を聞いてくれ、私が経済的に困難な状況にあると知ると、この学校で働かないかと誘ってくれました。通常の応募と同じように、履歴書を送って面接を受け、能力を評価された後に、2010年からは図書館の職員として働き始めました。現在は学校の創立者の秘書として働いていますが、秘書として働き始めた当初は仕事がわからず、創立者が細かく仕事の仕方を教えてくれたので、自分をスキルアップさせることができました。また、スタッフのスキルアップや仕事の効率をあげるため、スタッフは自分の興味のある研修に申し込み、学校側の同意を得ると費用を負担してもらうこともできます。

通常の職場と同じように、給与は最低賃金以上が保障されています。毎日3食の食事が支給され、子どもがこの学校に学費無料で入学できるなどの特典も付与されます。

学校スタッフの就業時間は7:30 - 17:00で、終業時間になっても仕事がまだ終わっていないスタッフがいると、仕事の終わったスタッフが手伝うことが習慣となっています。これは“もらうことを知るものは返すことも知らないといけない”という、学校からもらった恩を返すための習慣です。この学校から教えて頂いたことに報いるため、私たちは仕事において最善をつくさなければなりません。また、誰かが欠けても仕事に支障をきたさないよう、代わりの人が仕事を手伝うことができるように、一人一人が色々な業務をこなせるようになる必要があります。ここでは助け合わないということは許されません。

人間教育に基づいた学校経営の現状と課題

学校スタッフの会議は3か月に1回行い、学校内の活動や変化について報告しあいます。しかしこの会議以外にも定期的に報告しあう機会を持ち合っています。それに加え、スタッフが学校の方針を理解し、人間性価値の5つの項目を日々の生活の中で応用してこの価値を習得することができるように研修会も行っています。

5. 生徒の学校経営への参画

学校は生徒の可能性を信じており、生徒に自分で考え、自分で成長できるようになってほしいため、自分の考えを表現する能力や学校経営に携わる力をつけることができるように、生徒たちに自分で考え、表現する機会を与える。

女子生徒(高校2年生)へのインタビューでは、「この学校にはたくさんの行事や活動があります。もし生徒が自分の興味のあることをしたいのなら、それを教員に提案し、教員はそれが適切であると判断したら実行に向けて支援してくれます。学校が行事や活動を行った後は、常に生徒に評価シートに記入してもらい、自分の意見を述べてもらいます。学校は生徒からの評価を参考にして、実際に行動に移すこともあります。しかし、学校がすべての生徒の意見を反映することが難しいのは理解しています。」と述べた。

質問紙調査の選択質問の間6「先生や学校は児童生徒の意見を取り入れてくれますか。」の結果、「たまに取り入れる」が47%で一番多かった。男子のほうが女子よりも教員が生徒の意見を取り入れてくれると感じている。学年別に考察しても結果はほぼ同じで、生徒の学年が上がれば学校はより意見を取り入れていくという訳ではない。小学校の男子が一人、「学校は生徒の意見を全然取り入れてくれない」と回答しており、当該校はこのことを懸念しなければならない。

寄宿学校であるため、先輩は後輩を助け、面倒を見る役目を持つ。教員はそれを外から見守り、手助けが必要な時は補佐をする。学校は教員と生徒の関係だけでなく、友人関係や先輩・後輩関係も重要である。

筆者がデータ収集のため学校を訪問していた時、高校2年生の生徒達がちょうど何か活動をしていたので、教員に質問したところ、タイ語の授業の一環として、企画書の書き方を学んでいるとのことだった。一般的な学校では、正しい企画書の書き方を教えることだけで終わるが、この学校では授業で学んだことを実際に使って生徒たちに体験させる。

まずはじめに、教員は生徒たちをいくつかのグループに分け、生徒たちに学校にある問題、あるいは学校をどのように改善したいかを考えてもらい、一緒にどのような企画を行うか考える。企画の目的と手順を計画した後は、教員や他のグループの生徒に企画の利点を伝え、みんなの賛同が得られるように発表する。

その後予算を出してもらうため学校にも企画を提案し、学校は一生懸命その企画を支援する。そこから生徒たちは企画を計画通りに実行し、時々計画通りに実行できないことにぶつかると、生徒達は

自分で問題解決のため考えることを練習できる。また、企画が終わった後も結果を見守る。企画を考え付いたグループだけが実行するのではなく、他のグループと協力し助け合いながら行う。生徒は学校のために活動できることに喜びを感じ、考え、実行し、結果を確認する。また、これは後輩たちに引き継いでもらう企画になることもでき、学校にとっても有益な活動である。生徒は受け身の立場だけではなく、主体者となって自発的に物事を行うことを学ぶことができる。

今回の企画は先輩が後輩のシラミを取り除く手伝いをするというものである。これはもともと教員の役割だったが、教員の負担を少しでも減らし、より身近に後輩の面倒を見ることができるようになり、自分の健康管理にも役立つことがこの企画の利点となる。また、先輩後輩同士が仲良くなり、後輩を怖がらせる先輩になるのではなく、愛情を持つ先輩になることができる。この企画のほかにも学校の前に花壇を作るなどの企画もあった。

生徒の学校経営への参画について校長は「学校の問題の中には、教員全員が問題解決のために真剣に助け合い、多くの時間を費やしても、生徒たち自身が問題を解決したい、現状を変えたいと感じないため、問題解決につながらないことがあります。しかし生徒たちに自分で考えてもらい、行動してもらおう活動を通すと、問題を知り、自分で現状を改善したいと思うようになり、友達同士、先輩から後輩、あるいは後輩から先輩に伝わり、効率よく問題を解決することを可能にできるのです。」と述べている。

6. 学校と保護者の連携

サッタヤサイ校は小学校1-3年生のみ新入生を募集し、小学校1年生は定員が30名、小学校2・3年生は欠員のみだけを募集する。サッタヤサイ校は私立学校であるため生徒を直接選ぶことができるので、学校は保護者への試験を通して生徒を選ぶ方法を採用している。

1) 生徒の入学のための保護者の試験

通常タイで行われる入学試験は、生徒の学力を試験し、定員数内で成績優秀な生徒から順に、合格することができる。しかし、サッタヤサイ校の入学試験では生徒は面接試験のみで、保護者は筆記試験と面接試験が課せられる。

保護者への試験に関して校長へインタビューした。

保護者への試験は、保護者が学校の方針に賛成するかどうかについての考え方を見ている。もしお子さんを学力優秀な生徒にしたいのなら、モラルを育て、美しい人格を形成することを優先するこの学校は適していません。筆記試験では保護者がどのような考え方をするのかを見ます。例えば、“あなたは人生で何を一番必要としますか。”との質問を投げ、保護者の回答から、自分中心に考えている、あるいは他の人のために考えているかを見ます。もし保護者の回答が自分の

人間教育に基づいた学校経営の現状と課題

ことしか考えていないようならば、お子さんが入学し、この学校で他者に分け与えること、そして他者を思いやることを学んだ後、家に帰ると保護者からは自分中心に物事を考えるよう教えられることになり、子どもたちを混乱させることとなります。よって後々に保護者と学校の考え方の不一致を事前に防ぐための選考方法となっています。保護者の中には文字を書くことができない方もいますが、要望があれば学校で代筆する人を用意しますし、3行の回答で合格された方もいます。学校の創立者自身が入学試験の問題作成、採点、合格者選出まですべてを行います。

当初は保護者への入学試験は実施しておらず、多くの問題が起きました。寄宿学校のため、保護者は学校に子どもを任せっきりにして、仕事に時間を使うことができると考えていたためです。7～8年前から保護者への入学試験を始め、保護者に学校のことを理解してもらい、学校を支援してもらえるようになりました。

保護者（40代女性、職業はアメリカで科学関係の仕事に就いている）へのインタビューで「なぜ子どもをこの学校に入学させたのか。」と尋ねたところ、

小学校2年生の娘はアメリカで生まれ育ち、最近この学校に入学したばかりです。小学校1年生の時はバンコクにある有名学校の一つで学ばせていましたが、良い人格を持つ人間に育ててほしいのならこの学校はふさわしくないとはいえず、新しい学校を探し、サッタヤサイ校を見つけることができました。

以前通っていた学校の大半は富裕層の子どもで、子どもたちは贅沢な暮らしをしていました。ある日学校に行く機会があり、小学2年生の子どもが一人、友達のを取って返そうとしません。物を取られた子の母親がその子に物を返すようお願いすると、その子どもは“物は返さない。自分の母親に代金を払わせる”と返事をしました。つまり、その子は自分が悪いことをしているとは全く思わず、欲しいものは何でもお金を払えば手に入れることができると考えていました。子どもたちは善悪を学ぶ必要がありますが、このような学校では子どもたちは賢い子に育っていくと思います。また、一般の学校は勉強量がとても多いです。例えば妹の子どもはバンコクにある小学校に通っている3年生ですが、毎朝5時に起き、6時前には家を出て学校に向かいます。一日中勉強し帰宅するとご飯を食べ、父親と一緒に夕方6時から夜8時まで試験勉強し、就寝します。友人たちは塾に通っているため、このように勉強しないと友人たちについていけなくなってしまうのです。でも私はどうしてこんなに勉強しないといけないのか理解できません。幼稚園受験に合格するため、塾に通う子どももいますが、そんな話を聞くだけで不快な気分になります。私の子どもはそうにたくはありません。

初めてサッタヤサイ校に来た時は、学校の外観を見て子どもを連れて帰ろうと思いましたが、中に入ると子どもたちの顔が清潔で落ち着いており、礼儀が正しく言葉使いも丁寧で、その姿を

見てとても感動しました。私の子どももこの学校が気に入ったようでした。学校の目的も自分自身の目標と合致しており、学校の構想も机上の物ではなく実際に行動できるものでした。

また、サッタヤサイ校の入学試験については、

保護者への筆記試験では4つの設問があり、自分の考えを表現することを問われました。保護者への面接ではどうしてこの学校に子どもを入学させたいのか問われました。私はこの学校の目標が保護者である自分の目標と一致すること、つまり心に重点を置き、よい人格を持つ人間を育てることを目標としている点ですと答えました。よい人格を育むには子どもの頃から教え込むことが必要で、大人になってからでは難しいです。最も重要なことはすべての組織や制度が人間を根本とすることです。今日、優秀な人たちはたくさんいますが、よい人格を持った人は少ないので、子どもをよい人格をもつ人に育てたいです。仕事で優秀な人たちに多く出会いますが、性格はよくありません。逆に、ただの掃除の従業員でも素晴らしい性格を持つ方もおり、自分の子どもはどんな心を持った人間に育ててほしいかを考えるようになりました。

その後、子どもが面接を受け、この学校で勉強したいかどうか、どうしてこの学校で勉強したいと思うのかを先生に質問され、私の子どもはこの学校が好きだから、そして空気がきれいで雰囲気がいからだと答えたようです。

という返答があった。

2) 学校と保護者の連携

学校と保護者の連携について校長へインタビューしたところ、「保護者と教職員による会議(PTA)は年に4回開かれ、2 Semesterに分けられます。Semester内に2回開催され、学校と保護者の話し合いの場としています。もし分からない問題があれば説明しあい、学校に欠けているところがあれば保護者は学校への支援を買って出てくれます。どんな活動を行うときも保護者は常に学校に参加する権利があり、支援する立場にあります。Semesterが始まる時、学校は保護者にどんな活動があり、いつ準備が必要か前もって伝えます。そして保護者同士で協力して他の保護者に学校の活動について伝えてもらいます。既に卒業した子どもを持つ保護者の中には、今も学校を手助けしてくれる方もいます。学校と保護者の関係は生徒が卒業したら終わるのではなく、家族のように続いていきます。」と述べた。

保護者と教職員による会議のほかにも、土日は保護者が寮にいる生徒に会うために学校を訪れる。

校長の顧問は「保護者は土日に子どもに会いに来るので、教師と保護者は常に連携をとっています。保護者も教員もお互い会って、今に、子どもはどんな状況かについて話し合うなど、とても親密です。時々しか来ることのできない家の遠い保護者も同じで、常に教員と連携をとります。保護者・生徒・

人間教育に基づいた学校経営の現状と課題

教員は助け合うことによって前進することができます。」また、校長は「時々子どもの願望が理解できない保護者や、子どもに敷いたレールの上を走らせたい、あるいは子どもに過度の期待を持つ保護者もいます。ここ数年間は保護者のための研修を数回開催し、外部から専門家を招聘して、子どもたちの成長のために保護者の理解と学校への協力が必要なことを、講演を通し伝えていきます。保護者はとても大切です。教員だけでは限界があるため、子どもの様子を電話越しに伝え、保護者に協力してもらうこともあります。長期休業期間は保護者が子どもの面倒を見るため、子どもの育て方についての知識を持つことが必要です。」とコメントしている。

保護者へのインタビューでは、「学校は何か活動がある時は常に保護者に連絡をくれます。先週は水に関する活動があり、私も参加し感動しました。もし何か分からないことがある場合は、いつでも教師に質問することができ、教師も明確に答えてくれます。」と述べた。

学校は子どもの成長を第一に考えることに真剣なので、学校と保護者の連携が上手にとれており、保護者と生徒、そして教員がともに成長することができている。

第2節 サッタヤサイ校に対する高評価の要因

現在急速にサッタヤサイ校は発展し、タイの教育界に認められている。自分自身に秘められた価値を引き出すために、すべての教科や活動に人間教育を取り入れた教育カリキュラムや教え方を持つ学校として、タイの人々や団体から支持を受けている。22年間の歴史を持つサッタヤサイ校に、多くの人々がこの学校の教育方法を研究するために見学に訪れている。サッタヤサイ校を成功させる要因は何であろうか。

創立者は、

成功の要因は、学問を通し子どもに幸せになってもらうことを第一としている点です。勉強ができる子も苦手な子も、父や母がいない子どもも、ここに学びに来ると幸福になれます。子どもが幸福だと、父母も幸福になれます。子どもをいい方向に変えていくことは可能です。もし子どもが幸福を感じるなら、よく勉強し、自分の人生を豊かにすることをもっと知りたと思うようになります。その変化は明らかです。州の教育地区が行った学力テストでは、サッタヤサイ校の結果が一番でした。学力に重点を置いていないにも関わらず、全国3万校以上の学校を対象に行われた学力テストでも、22位の成績でした。多くのご両親がお子さんを入学させたいと思っています。勉強することに幸福を感じるのなら、自然に優秀になるのです。

と述べた。

校長は、このことについて、

サッタヤサイ校の成功の要因は“アイデンティティ”だと思います。この学校を創立した目標は、他の学校にはない、人間が幸福になるために必要な人間性の価値を根本とすることです。現在、社会が悪化し、幸福感や平和が失われつつありますが、社会が探しているものがまさにこの学校だと感じます。社会は今、人間という原点に立ち返り、人間の内部を発展させようとしています。私たちが重点を置いている人間性の価値こそ、社会が探している答えになると思います。また、この学校の生徒の活躍も社会から評価を得ています。創立当初、私たちにもこの学校で学んだ生徒たちが社会に出た後どうなるか予測できませんでしたが、現在10期生まで卒業し、社会で働いています。彼らは社会生活の中で幸福を感じ、社会にとって有益な人物となっており、この学校の方針が彼らをそのようにしていると感じています。また、社会は現在そのような人物を探しています。人間性の価値の重要性が見直されている中、この学校が人間性の価値を大切にしているため、社会の人々も私たちに興味を持ち始めたのだと思います。

と述べ、さらに筆者が「サッタヤサイ校はたくさんの賞を受賞されているんですね。」と尋ねたところ、

私たちは賞をもらうために学校の方針を変えたりしません。求めずに賞を得ることができたのです。私たちに価値があると、相手にも自然に理解してもらえます。学校の方針は全ての事柄に応用できます。例えば、タイの学校では生徒の麻薬使用が問題となっていますが、この学校では生徒たちが自分で善悪の判断をすることができるため、麻薬問題は一切ありません。また、この学校の発明や創作は毎年たくさんの金賞を受賞しています。これは学校が人間を根本としており、他の学校と違い生徒が自分で考える力を養い、潜在能力を引き出す教育を行っていることで、生徒たちが新しいアイデアを豊かに生み出すことができるためだと考えます。

という返答があった。

校長の顧問は、

この学校は幸福な社会と言えます。学校経営にはモラルと人間性の価値を取り入れ、すべての人が共に成長できます。すべての人が持つ潜在能力をそれぞれ引き出し、真剣に心を合わせて協力し、私たちが達成できることは自分たちだけで終わるのではなく、子どもたちもできるよう心を砕きます。学校の成果は、子どもたちの生活や子どもたちの成長など子どもたちを見て評価することができます。生徒一人一人を知るために、教師は協力して子どもを観察し、気づいた点を会議の中で発表したり、生徒がテストを受ける時や話をしている時を観察したりして、子どもの考え方を把握します。また、教師は子どもたちがここで幸せに過ごせるよう触発を与え、父母は

人間教育に基づいた学校経営の現状と課題

子どもを励まします。そして創立者、校長、教師、教職員みんながチームとして子どものために働きます。学校の成果は子どもに現れます。創立者、校長、教師、教職員みんなの心が子どもを成長させたいと思うことが大事で、同時に子どもたちは正しい道の中では自分で選択することができる自由が与えられている必要があります。

と述べた。

最後に学校が次に取り組むべき問題についてインタビューを行った。筆者が「これからどんな面を伸ばしていく必要があると思いますか。」と校長に質問したところ、「一人一人の心です。この学校は心に重点を置いています。心に関する問題は終わりがありませんので、常に改善していくことが大切です。改善する余地があることはすべて問題と呼ぶことができます。しかし問題が私たちを悪くするととらえるのではなく、問題を通してよりよい方法を見つけることができるととらえるべきです。」

さらに「将来学校をどのようにしていきたいですか。」と質問をつづけると「現在教育学部の大学建設を構想しています。学生には人間性の価値について学んでもらい、実際に子どもに教授するときにメリットとなるよう人間教育を根本とした深い教え方ができる教員を輩出する大学としたいです。そのような教員を社会も必要としており、その数はまだ十分ではありません。」という回答が返ってきた。

また、「サッタヤサイ校は寄宿学校ですが、寄宿学校ではなく登下校のある学校がサッタヤサイ校と同じ教育方針を持って、成功できると思いますか。」と尋ねると、

「多くの国の学校は毎日通学する必要がありますが、そうすると子どもの環境をコントロールすることができないため、成功するのは少々難しいと思います。しかしタイのいくつかの学校では教員がこの学校を見学して得たものを応用して学校経営に採用し、子どもたちをよい方向に変えていくことに成功している例もあります。鍵となる人物は教員自身です。そして、教員と保護者は理解し合うことが大切です。もし教師と保護者が協力し合い、子ども自身もどうやって生活するべきか自分で判断することができるならば、寄宿学校でなくても成功することは可能だと思います。しかし、外からの影響が多いため、子どもたちがよい方向に変わっていくのには時間がかかるかもしれません。」と答えた。

保護者の意見として、インタビューが可能であった2人の発言を以下で紹介する。

母親（40代、バンコク出身）

子どもがこの学校に入学してから、プラスの面とマイナスの面どちらにおいても以前と比べ変化がありました。例えばマイナスの面は、友達の言葉を真似して使ったりすることですが、これは直すこともできる小さなことであるため私も気にしていません。

プラスの変化の例は、子どもが冷房のある部屋で寝なくてもいいと言ったり、私に向かって節水を心掛けるように教えてくれたりなどです。以前はそうではありませんでした。その他にも7歳とは思えない発言をして、私を驚かせています。子どもが優秀になり、幸せを感じます。寄宿学校であるにも関わらず、よい環境、雰囲気、社会、文化に囲まれて子どもは育っているのだと

確信します。しかし、子どもがある程度大きくなったら他の学校に通わせることも視野に入れています。子どもが小さい時には良い人格を形成することに力を入れ、大きくなってから学力のほうに力を入れ優秀にすることも可能だと思います。高校3年生まで子どもをこの学校に通わせ続けることは、今は考えていません。もし高校3年生を卒業するまでこの学校に通うことになるのであれば、この学校は学力の面において競争力が低く、他の学校に勝つことができないため、塾に通わせると思います。

ここで改めて、生徒の意見を取り上げた質問紙調査結果を見ておきたい。選択質問の間1「この学校の勉強は楽しいですか。」に対して、「大変楽しい」25%、「楽しい」49%、「ふつう」23%、「あまり楽しくない」2%、「全然楽しくない」1%という回答が見られ、この結果から、74%の生徒は学校の勉強が楽しいと感じていることが分かり、選択質問の間7「どの学年までこの学校で勉強するつもりですか。」に対して「小学校6年生」2%、「中学校3年生」5%、「高等学校3年生」55%、「まだ分からない」38%と答えている。全体としては「高等学校3年生」が一番多い。小学生を見ると「まだ分からない」が一番多い。記述質問の間3「卒業したら何をするつもりですか。」に対する回答、「大学に進学」72%、「就職」12%、「無回答」3%、「まだ分からない」1%、「その他」12%という結果を合わせて考えると、この学校の勉強が楽しい、高校3年生まで勉強したい、卒業したら大学に進学したいという生徒が半数以上を占めていることが確かめられた。

サッタヤサイ校の成功の要因は人間教育にもとづいた学校経営、生徒や学校関係者全員を大切に、お互いに成長して、継続的な開発をするため良い結果が出たのではないかと考える。

終わりに—本研究の要約—

本研究の目的は、タイにおける人間教育にもとづいた学校経営の現状を分析し、課題を明らかにしていくことであった。

第1章では、タイにおける学校経営と人間教育の現状、人間教育の思想を整理し、学校経営と人間教育の現状を検討した。

第1節では、タイにおける人間教育に関する思想について論じた。本論文で取り上げたタイのサッタヤサイ校は人間教育を行う数少ない学校である。サッタヤサイ校は、人間教育を掲げアットオン・チュムサイナアユッタヤ (Dr.Art-ong Jumsai Na Ayudhya)博士によって1992年に創立された。人間教育にもとづいたタイのサッタヤサイ校は、社会に貢献する美しい人間をつくることを目指す学校である。

第2節では、タイの学校教育制度について述べた。学校教育制度内において学習する割合が多いことから、学校教育が子どもに大きな影響を及ぼしていると考えた。学校には、生徒の成長過程において重要な役割や責任があることを明らかにした。

第3節では、タイの学校経営と人間教育の現状と課題について述べた。まず、ユニセフ協会の2001-2005年の調査(ONESQA)ではタイの65%の学校が生徒、教員、学校経営の面で一定の基準(学校の質)を下回っていることから、学校経営における課題が大きいことを指摘した。基準を満たしている学校は1.2%しかないのが現状である。2009年の学校教育の事務局に割り当てられた予算は国家予算の11.5%であり、年間国家予算の最大の割合にもかかわらず、一定の基準を満たしている学校が少ないことも明らかになった。こうした学校教育の質の低下は、学力低下と社会問題を引き起こす大きな要因の一つと考えられることを示した。また、2012年のデータによると青少年犯罪の一番多い年代は中学生で、次は小学生、その後には高校生と高校生以上の年代の青少年であり、学校に通っていない青少年の割合が一番低かったこともタイの課題の一つとして取り上げた。

タイでは、1979年には独自の目標や指導スタイルを持った「オルタナティブ教育」を行う学校および機関が開設され、現在では私立学校を含め209を数える。オルタナティブ教育(人間教育)の優位性は示されてはいるものの、社会的認知度が低く、教育の成果を確認することが難しいなど多くの課題が残っていることを指摘した。

第2章、第3章ではタイの学校を対象とした事例調査を通して人間教育にもとづく学校経営について論じた。2013年8月13-14日・23-25日にサッタヤサイ校に訪問し、調査に協力いただいた。この事例調査は、生徒への質問紙調査、インタビュー調査(半構造化面接)、参与的観察の3つの方法を採用した。

第2章では、人間教育を行う学校としてタイ国内外で注目されているサッタヤサイ校(Sathayasai

Schoolโรงเรียนสัจจวิทยา)について、質問紙調査やインタビューを通して、その特徴を捉えようとした。特にカリキュラムの特色として「人間性の価値」の授業や協同学習に注目した。“人間性の価値”の意味として生徒が理解しているものの中で一番多いのは「自分自身が持つ価値のこと」、2番目は、「人間が知り、持ち、そして行動すべき価値のこと」、3番目は「自らの人間性の価値を他者や社会貢献に活用すること」である。筆者はこのように生徒が自分と他人が価値を持って、引き出し、他者や社会のために貢献したいと考えていることは、悪意をもった行動やいじめ問題、社会問題などを少なくし、社会貢献に寄与すると考えた。生徒は自分と他人が価値を持って、引き出し、他者や社会のために貢献したいと考えていることがわかった。また、人間性の価値を理解するために、“人間性の価値”の授業だけではなく、すべての科目、すべての活動において人間性の価値を教えていることが明らかになった。

さらに、サッタヤサイ校では、生徒に対して「人間性の価値」を知るために良いとされるものは、すべての科目に取り入れられ、各科目との関係性も教えられているため、学習そのものが生活に関連していることを示した。

第3章では、タイのサッタヤサイ校の学校経営について教員・職員・生徒・保護者へのインタビューを通して、明らかにした。

第1節では、創立者へのインタビューを通して、学校経営の理念と思想について述べた。サッタヤサイ校は参加型の学校経営(Participation)であり、学校で問題が起きた場合は、学校全体で協同してすぐに解決するために協力することも、同校の特徴であるとした。また、教員の採用では、生徒の意見が採用に関する判断材料となるなど、生徒の学校経営への参画が見受けられた。学校は生徒の可能性を信じており、生徒に自分で考え、自分の考えを表現する能力や学校経営に携わる力をつけることができるようにしたいとし、生徒たちにとって、学校経営への参画は、自分で考え、表現する機会ともなっていた。

第2節では、サッタヤサイ校に対する高評価の要因について考察した。サッタヤサイ校の成功の要因は人間教育にもとづいた学校経営、生徒や学校関係者全員を大切にし、お互いに成長して、継続的な開発をするため良い結果が出たのではないかと結論づけた。